

長岡京市文化財調査報告書

－ 伊賀寺遺跡の調査 遺物編・まとめ －

第 79 冊

2 0 2 2

長 岡 京 市 教 育 委 員 会

編 集 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市文化財調査報告書

－ 伊賀寺遺跡の調査 遺物編・まとめ －

第 79 冊

2 0 2 2

長 岡 京 市 教 育 委 員 会

編 集 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

序 文

本報告書は、長岡京市下海印寺において、長岡京市教育委員会が国庫補助事業として平成 21 ～ 26 年度に継続的に実施した伊賀寺遺跡の調査成果をまとめたものです。

ここに紹介する調査が実施された頃は、京都縦貫自動車道の建設が進み、のどかな田園風景が目まぐるしく変化していく時期でした。現在では、伊賀寺遺跡周辺は住環境の変化とともに多くの遺跡が失われてしまいましたが、発掘調査で見つかった竪穴建物の一部などは現状保存されているものもあります。

さて、伊賀寺遺跡とは、京都盆地南西部に位置する桂川水系の一つである小泉川流域にひろがる縄文時代の集落遺跡であります。近年の発掘調査によって、縄文時代中期および後期の竪穴建物が複数棟確認され、同時期の京都盆地では最大級の集落であったとも指摘されています。その内、建物跡は近畿地方では稀有な石囲炉を伴っており、東方地域の影響が考えられています。

また、本書で報告しますように、日本海岸沿いで産出される碧玉の原石や加工石材の出土から、玉造りの生産拠点であった可能性がでてきました。遺構や遺物の状況から、伊賀寺遺跡の人々が広域な地域と活発に交流を行っていたことが明らかになってきました。

こうした発掘調査の成果を基に、地域の歴史・文化を活かしたまちづくりや、文化財に親しむことができる環境の整備に取り組むことで、地域を超えて様々な人々が訪れる仕組みを検討していく所存でございます。

最後になりましたが、発掘調査にあたり数々のご助力をいただきました土地所有者や地元協力者の方々、ご指導・ご助言をいただいた諸先生方並びに調査を担当していただいた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関に深く感謝いたします。

本書が文化財保護の普及・啓発の一助となり、また地域学習の資料として広く活用いただければ幸いです。

令和 4 年 3 月

長岡京市教育委員会

教育長 西 村 文 則

凡 例

1. 本書は、長岡京市教育委員会が国庫補助事業として公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに事業を委託して実施した、平成 21 ～ 26 年度に実施した発掘調査の報告である。遺構については、令和 2 (2020) 年に遺構編として報告した。本書では主に遺物について報告する。
2. 長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分けて通算したものである。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の遺跡分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』(1977 年) 収録の旧大字小字名による地区割りと同地区内における調査回数を示す。
3. 長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第 38 巻第 4 号 (1992 年) の復原案に従った。
4. 本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一 (1991 年) によった。
5. 引用文献は、著者および発行年 (西暦) を文中に () で示し、巻末に掲載した。
6. 本書において使用している遺構番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査次数+番号であるが、煩雑さを避けるため、調査次数を省略している。「SD01」の場合、調査次数を冠した「SD〇〇〇〇 01」が正式な番号である。
7. 本書で使用している方位と国土座標値は、世界測地系の第VI系によっている。
8. 本書の挿図の土層名で〈 〉を付けて表示した記号は、『新版標準土色帳』(1997 年版) の JIS 表記法による土色名である。
9. 本書の執筆と編集は技術補佐員・整理員の協力のもと山下研が行った。

本文目次

| | | |
|-----|---|----|
| 第1章 | 調査の概要 | |
| 1 | 伊賀寺遺跡の概要と周辺遺跡 | 1 |
| 2 | 各調査検出遺構の概要 | 4 |
| 第2章 | 各調査の出土遺物 | |
| 1 | 長岡京跡右京第 975 次 (7AN OOD-8 地区) 出土遺物 | 5 |
| 2 | 長岡京跡右京第 1016 次 (7AN OOD-11 地区) 出土遺物 | 22 |
| 3 | 長岡京跡右京第 1033 次 (7AN OOD-12 地区) 出土遺物 | 24 |
| 4 | 長岡京跡右京第 1078 次 (7AN OOD-14 地区) 出土遺物 | 26 |
| 第3章 | まとめ | 31 |

図 版 目 次

長岡京跡右京第 975 次調査

- 図版 1 出土土器 1
- 図版 2 出土土器 2
- 図版 3 出土土器 3
- 図版 4 出土石器 1
- 図版 5 出土石器 2
- 図版 6 出土石器 3
- 図版 7 出土石器 4

長岡京跡右京第 1016 次調査

- 図版 8 出土遺物

長岡京跡右京第 1033 次調査

- 図版 9 出土遺物

長岡京跡右京第 1078 次調査

- 図版 10 出土遺物 1
- 図版 11 出土遺物 2
- 図版 12 出土遺物 3

挿 図 目 次

第1章 調査の概要

| | | |
|-------|-----------------------------|---|
| 第 1 図 | 伊賀寺遺跡の位置と長岡京条坊復原図 (1/40000) | 2 |
| 第 2 図 | 調査地位置図 (1/5000) | 3 |

第2章 各調査の出土遺物

| | | |
|--------|--------------------------------------|----|
| 第 3 図 | 右京第 975 次調査 出土遺物実測図 1 (1/4) | 6 |
| 第 4 図 | 右京第 975 次調査 出土遺物実測図 2 (1/4) | 7 |
| 第 5 図 | 右京第 975 次調査 出土遺物実測図 3 (1/2) | 8 |
| 第 6 図 | 右京第 975 次調査 出土遺物実測図 4 (1/2) | 9 |
| 第 7 図 | 右京第 975 次調査 出土遺物実測図 5 (1/2) | 10 |
| 第 8 図 | 右京第 975 次調査 出土遺物実測図 6 (1/2) | 11 |
| 第 9 図 | 右京第 975 次調査 出土遺物実測図 7 (1/2・1/4) | 12 |
| 第 10 図 | 右京第 975 次調査 出土遺物実測図 8 (1/2) | 13 |
| 第 11 図 | 右京第 975 次調査 出土遺物実測図 9 (1/4) | 15 |
| 第 12 図 | 右京第 975 次調査 出土遺物実測図 10 (1/4) | 16 |
| 第 13 図 | 右京第 975 次調査 出土遺物実測図 11 (1/1・1/2・1/4) | 17 |
| 第 14 図 | 右京第 1016 次調査 出土遺物実測図 (1/4) | 23 |
| 第 15 図 | 右京第 1033 次調査 出土遺物実測図 (1/4) | 25 |
| 第 16 図 | 右京第 1078 次調査 出土遺物実測図 (1/4) | 26 |
| 第 17 図 | 右京第 1078 次調査 出土遺物実測図 2 (1/4) | 27 |
| 第 18 図 | 右京第 1078 次調査 出土遺物実測図 3 (1/4) | 28 |
| 第 19 図 | 右京第 1078 次調査 出土遺物実測図 4 (1/4) | 29 |
| 第 20 図 | 右京第 1078 次調査 出土遺物実測図 5 (1/4) | 30 |

第3章 ま と め

| | | |
|--------|------------------------|----|
| 第 21 図 | 縄文時代中期の主な遺構 (1/2000) | 32 |
| 第 22 図 | 縄文時代後期の主な遺構 (1/2000) | 33 |
| 第 23 図 | 奈良時代末～長岡京期の遺構 (1/2000) | 34 |

付 表 目 次

| | | |
|------|-------------------------------|----|
| 附表-1 | 本書報告調査地一覧表 | 4 |
| 附表-2 | 右京第 975 次調査 出土石器・石製品観察表 | 18 |
| 附表-3 | 報告書抄録 | 37 |

第1章 調査の概要

本書は、伊賀寺遺跡における縄文時代集落の範囲や内容を確認するために、平成21年度から26年度にかけて、国庫補助事業として実施した発掘調査に関するものである。遺構に関しては、令和元年度に『伊賀寺遺跡の調査 遺構編』（山下2020）として報告しており、本書では主に遺物について記述する。遺構や調査経過、周辺の遺跡などについては、以下で概要を述べるが、詳細については『遺構編』を参照願いたい。

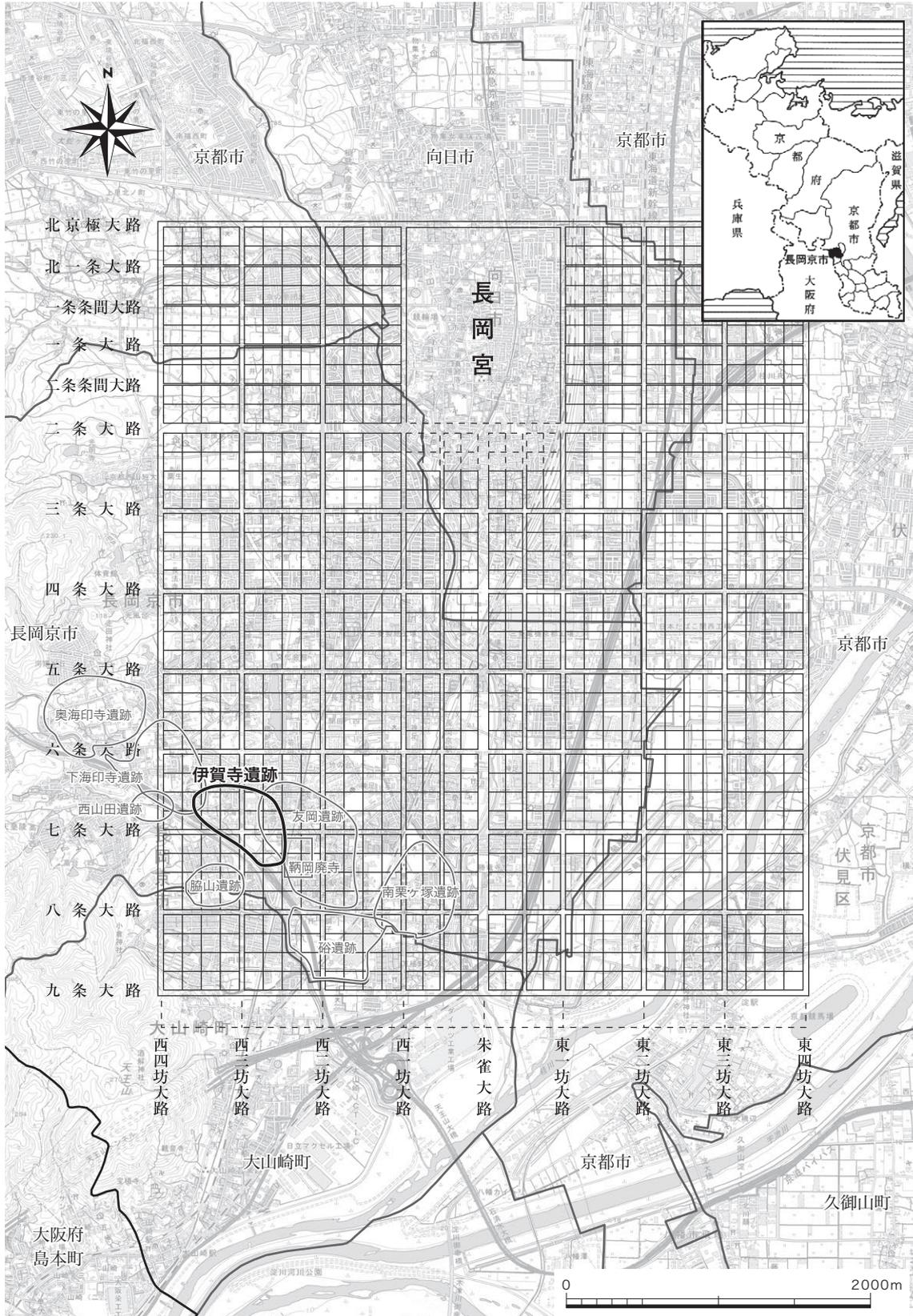
1 伊賀寺遺跡の概要と周辺遺跡

伊賀寺遺跡は長岡京市の南端に近く、小泉川の左岸段丘上に立地する。小泉川は北西から南東方向に貫流し、桂川と合流する。小泉川左岸では、伊賀寺遺跡のほか奥海印寺遺跡や下海印寺遺跡、友岡遺跡などが近接、あるいは一部重複しながら広がっている。また、伊賀寺遺跡から南東には、友岡遺跡と重複して鞆岡廃寺が所在する。奥海印寺遺跡は旧石器時代、縄文時代、奈良～鎌倉時代、近世の複合遺跡である。平安時代に僧道雄により創建されたと伝えられる海印寺が地名の由来となっている。現在、子院のひとつである寂照院が残るのみで、寺院の実態は明らかではない。奥海印寺には旧小字に「城」「荒堀」などがあり、城館の存在が推定されている。縄文時代では石鏃やサヌカイトの剥片が採集されており、晩期の土坑が検出されている。下海印寺遺跡は旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。縄文時代では草創期や早期、中期、後期の遺物が出土している。後期には土器埋設遺構や配石遺構、柱穴群が検出され、集落の一端が確認されている。友岡遺跡は縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。縄文時代では中期の土器や石器が多量に出土した。飛鳥～奈良時代では護岸が施された溝や掘立柱建物が確認されている。鞆岡廃寺は飛鳥～平安時代の瓦が出土しており、友岡遺跡で検出された遺構群との関連が指摘されているものの、実態は明らかでない。

伊賀寺遺跡は長岡京跡と重複しており、条坊復原では右京七条三坊・四坊、右京八条三坊・四坊にかけての範囲に所在する。伊賀寺遺跡ではこれまで多くの発掘調査が実施されてきたが、伊賀寺遺跡単独の調査次数は付されていない。そこで、本書では伊賀寺遺跡における各調査について、長岡京跡の調査次数で呼称することにする。また、挿図等では煩雑さを避けるため、「長岡京跡右京第〇〇次調査」を「R〇〇」と略記する場合がある。

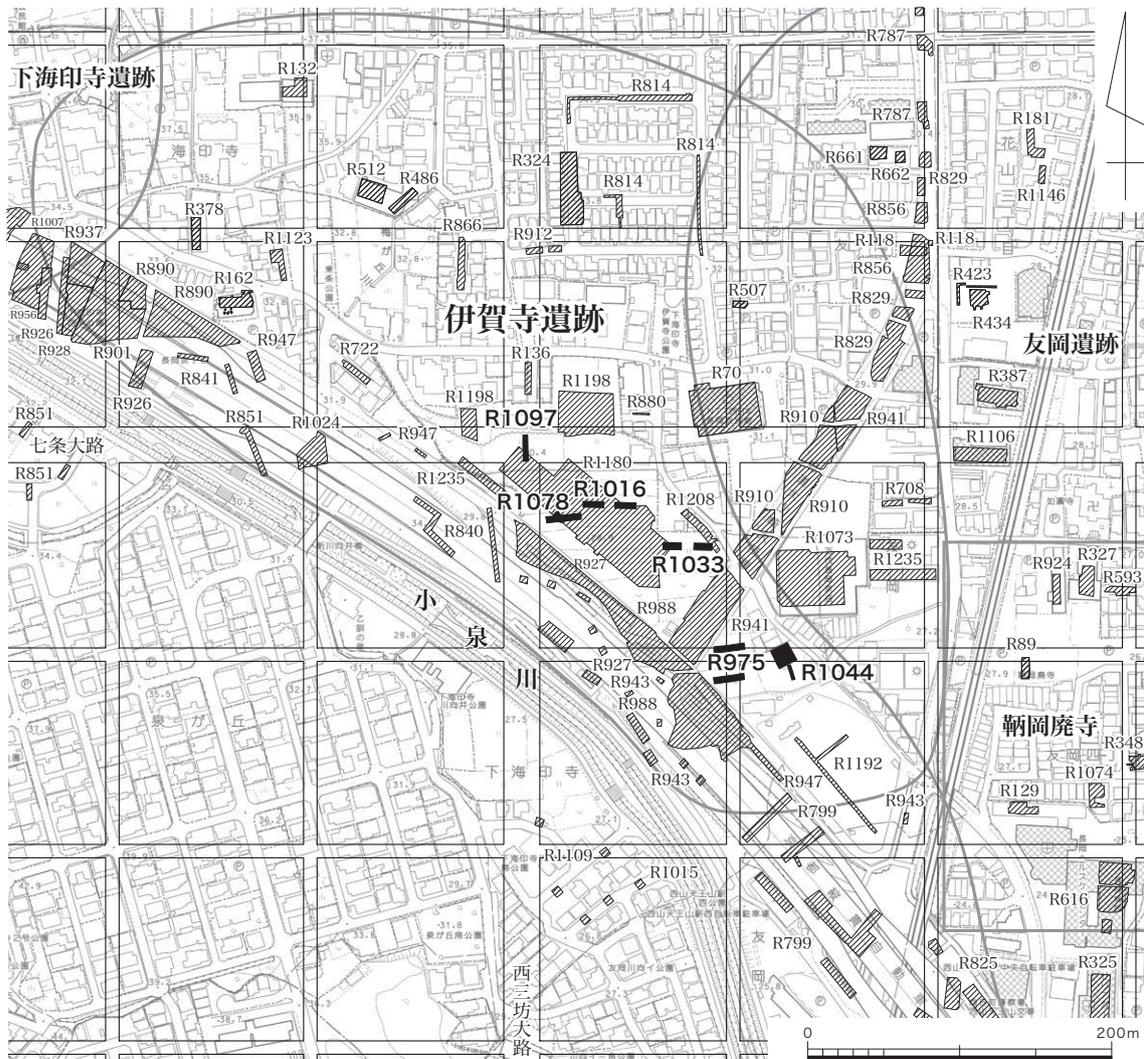
伊賀寺遺跡は昭和56（1981）年に実施された長岡京跡右京第70次調査（高橋ほか1982）の成果を受けて、縄文時代から近世にかけての複合遺跡として周知された。平成15（2003）年からは、京都縦貫自動車道建設やそれに関連する府道の建設工事に伴う大規模な発掘調査が継続的に実施された。一連の調査では、縄文時代や古墳時代、奈良時代～長岡京期の遺構などが数多く検出され、大きな成果が得られている。特に、縄文時代では中期の石囲炉をもつ堅穴建物や後期の火葬墓など、西日本では類例の少ない遺構を備えた大規模な集落の存在が明らかとなった。

2 伊賀寺遺跡の概要と周辺遺跡



第1図 伊賀寺遺跡の位置と長岡京条坊復原図 (1/40000)

長岡京市では京都縦貫自動車道や、それに関連する道路の建設・整備の進展に加え、阪急京都線の新駅（現西山天王山駅）建設も計画されていたことから、伊賀寺遺跡周辺の開発が大きく増加することが予想された。そこで、長岡京市教育委員会は伊賀寺遺跡における縄文時代集落の範囲や内容の確認と、長岡京跡南西部の実態把握を目的として平成 21（2009）年度から平成 26（2014）年度まで継続的に発掘調査を実施した（付表 1）。平成 30（2018）年度から令和元（2019）年度にかけて、これらの調査を実施してきた範囲において、大規模な開発に伴う右京第 1180 次調査が実施された（岩崎 2020）。調査面積は 3,700㎡を超え、旧石器時代、縄文時代、古墳～飛鳥時代、奈良時代～長岡京期の遺構や遺物が数多く確認された。縄文時代では中期末や後期の竪穴建物が複数検出され、集落の広がりや遺構の変遷を考えるうえで重要な成果が得られている。奈良時代末～長岡京期においては、整然と配置された大型掘立柱建物群が検出された。遺構の配置や出土遺物から、長岡京遷都直前から遷都間もない頃の遺構群と考えられており、長岡京造営に関する貴重な資料が得られている。



※太字・黒塗り調査区が本書に掲載した調査地

第2図 調査地位置図 (1/5000)

2 各調査検出遺構の概要

長岡京跡右京第 975 次調査

土坑 3 基、溝 1 条、落ち込み 24 基、小穴 36 基以上、集石遺構 1 基等が確認された。溝は古墳時代後期である。縄文時代の遺構には土坑、小穴、落ち込み、集石遺構などがある。集石遺構は縄文時代後期の集石墓の可能性が高い。遺物の出土状況から、遺構の多くは縄文時代後期のものと考えられている。

長岡京跡右京第 1016 次調査

土坑 5 基、小穴 11 基、落ち込み 1 基が検出された。縄文時代の遺構は確認できていない。遺構の多くは、出土遺物から奈良時代～長岡京期と考えられる。右京第 1180 次調査の結果、本調査区内の小穴や土坑が、飛鳥時代や奈良時代～長岡京期の掘立柱建物を構成する柱穴であることが明らかとなった。

長岡京跡右京第 1033 次調査

土坑 5 基、小穴 13 基のほか、土器が埋納された SX06 が検出された。SX06 は土坑内に土師器の甕が伏せて埋納されたと考えられるもので、内部には万年通寶 1 点、神功開寶 2 点を含む銭貨 10 点以上が納められていた。土師器の甕は長岡京期のものとみられ、地鎮に関する遺構の可能性があろう。右京第 1180 次調査で検出された掘立柱建物群の周辺であることは示唆的である。

長岡京跡右京第 1044 次調査

土坑 1 基、溝 2 条がある。溝では平安～鎌倉時代の土器が出土した。ほかは時期不明である。

長岡京跡右京第 1078 次調査

掘立柱建物 2 棟、土坑 3 基、溝 1 条、落ち込み 1 基、小穴 35 基以上が検出された。掘立柱建物は飛鳥時代で、右京第 1180 次調査で規模が明らかとなった。落ち込み SX01 は縄文時代中期末の土器がまともって出土した。縄文時代では後期の土坑や小穴も検出されている。

長岡京跡右京第 1097 次調査

小穴が 10 基確認された。配置や規模から、掘立柱建物としては認識できなかった。

付表-1 本書報告調査地一覧表

| 調査次数 | 地区名 | 所在地 | 現地調査期間 | 面積 | 備考 |
|--------------------|---------------|-------------------------|-------------------------------------|------|------------------------|
| 長岡京跡 右京第 975 次 | 7AN OOD-8 | 長岡京市下海印寺 下内田 5-1、6-1 | 2009 年 6 月 10 日 2009 年 8 月 18 日 | 160㎡ | 『長岡京市報告書』第 55 冊 2010 年 |
| 長岡京跡 右京第 1016 次 | 7AN OOD-11 | 長岡京市下海印寺 下内田 14-1 番地 | 2010 年 12 月 13 日 2011 年 1 月 25 日 | 112㎡ | 『長岡京市報告書』第 59 冊 2011 年 |
| 長岡京跡 右京第 1033 次 | 7AN OOD-12 | 長岡京市下海印寺 下内田 12-1 | 2011 年 10 月 17 日 2011 年 11 月 9 日 | 120㎡ | 『長岡京市報告書』第 61 冊 2012 年 |
| 長岡京跡 右京第 1044 次 | 7AN OOD-13 | 長岡京市下海印寺 下内田 1-1 | 2012 年 7 月 2 日 2012 年 8 月 29 日 | 187㎡ | 『長岡京市報告書』第 64 冊 2013 年 |
| 長岡京跡 右京第 1078 次 | 7AN OOD-14 | 長岡京市下海印寺 下内田 13-1 | 2013 年 12 月 9 日 2014 年 1 月 25 日 | 98㎡ | 『長岡京市報告書』第 66 冊 2014 年 |
| 長岡京跡 右京第 1097 次 | 7AN OOD-15 | 長岡京市下海印寺 下内田 23 番地 | 2014 年 11 月 4 日 2014 年 11 月 26 日 | 56㎡ | 『長岡京市報告書』第 68 冊 2015 年 |

第2章 各調査の出土遺物

伊賀寺遺跡で実施された各調査では、縄文時代から近世に至るまでの各時期の遺物があり、土器や石器・石製品、金属製品など多様な遺物が出土している。伊賀寺遺跡は前述のとおり、長岡京跡と重複している。平成21～26年度に実施された本調査については、伊賀寺遺跡単独の調査次数は付されていない。ここでは、煩雑さを避けるため長岡京跡の調査次数で呼称する。

なお、右京第1044次調査・右京第1097次調査については遺物の出土が少ないうえ、大半が細片であったことから、本報告では右京第975次調査・右京第1016次調査・右京第1033次調査・右京第1078次調査の出土遺物について記述する。

1 長岡京跡右京第975次調査（7ANOOD－8地区）出土遺物

右京第975次調査では整理箱で27箱の遺物が出土した。出土遺物は古代の土師器や須恵器、古墳時代の土器が少量確認できるが、大半は縄文時代の土器・石器類である。縄文時代の遺物のうち、半数以上は石器・石製品が占める。

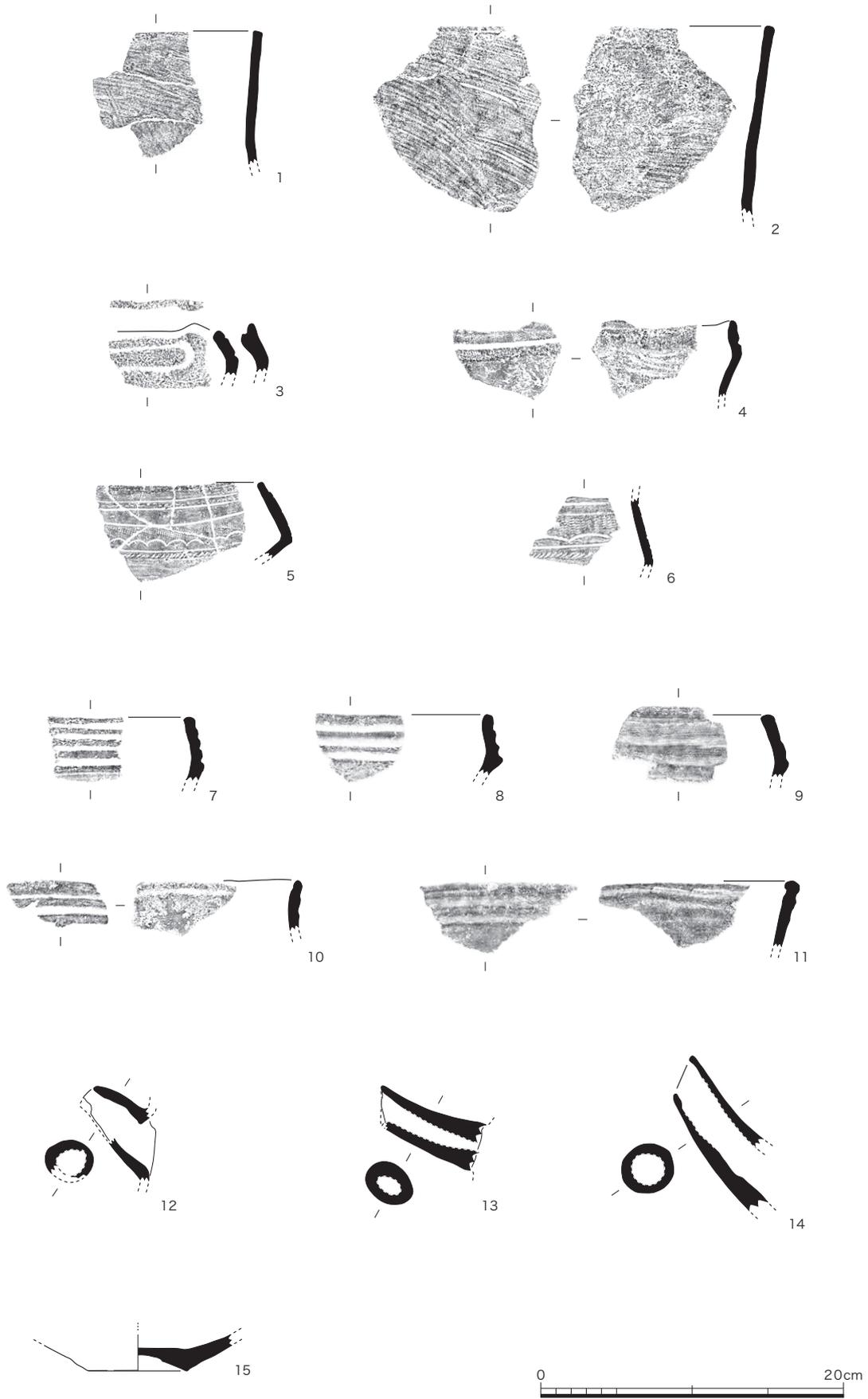
右京第975次調査では1トレンチ、2トレンチの2か所の調査区を設定している。土層の堆積状況は耕作土と3層の床土層が認められ、その下位の明茶褐色砂質土層（第1層）は縄文時代～歴史時代の遺物が包含されている。続く第2層の黒褐色粘質土層には土師器や須恵器とともに縄文時代の土器や石器が多く含まれていた。第3層は黄褐色粘質土が堆積し、出土する遺物は縄文時代のものに限られる。

土 器（第3・4図）

縄文時代の土器を図示した。遺構から出土したものは1トレンチのP29で出土した8のみで、他は遺物包含層からの出土である。第2層は古代の土器とともに縄文時代後期の土器が出土しており、第3層では縄文時代後期と中期の土器が出土している。出土量から言えば、後期の土器が主体を占めており、検出された遺構の多くは後期に属する可能性が高い。

調査区は1トレンチと2トレンチの2か所に分かれており、7・8・16・18・19・21は1トレンチ、その他は2トレンチで出土した。

1～15（第3図）は縄文時代後期の土器である。遺物包含層で出土したものは、4・6・9・10が第3層で出土し、ほかは第2層で出土した。1・2は深鉢で、巻貝条痕が施される。口縁部はやや外傾して立ち上がり、2は口縁端部が面取りされる。縄文時代後半の元住吉山式～宮滝式に位置づけられる。3～6は元住吉山式土器である。3は口縁部に沈線による楕円形の区画が認められ、突起には刺突が施される。4は口縁部外面に沈線が1条めぐり、胎土は雲母が目立つ。5は浅鉢である。口縁部は逆くの字形を呈し、沈線と連弧文が施される。沈線間には巻貝による擬似縄文や刺突が認められる。6も5と同様に横位沈線と連弧文、巻貝による擬似縄文と刺突が施される。3・5・6は元住吉山I式、4は元住吉山I～II式である。7～11は口縁部に凹線



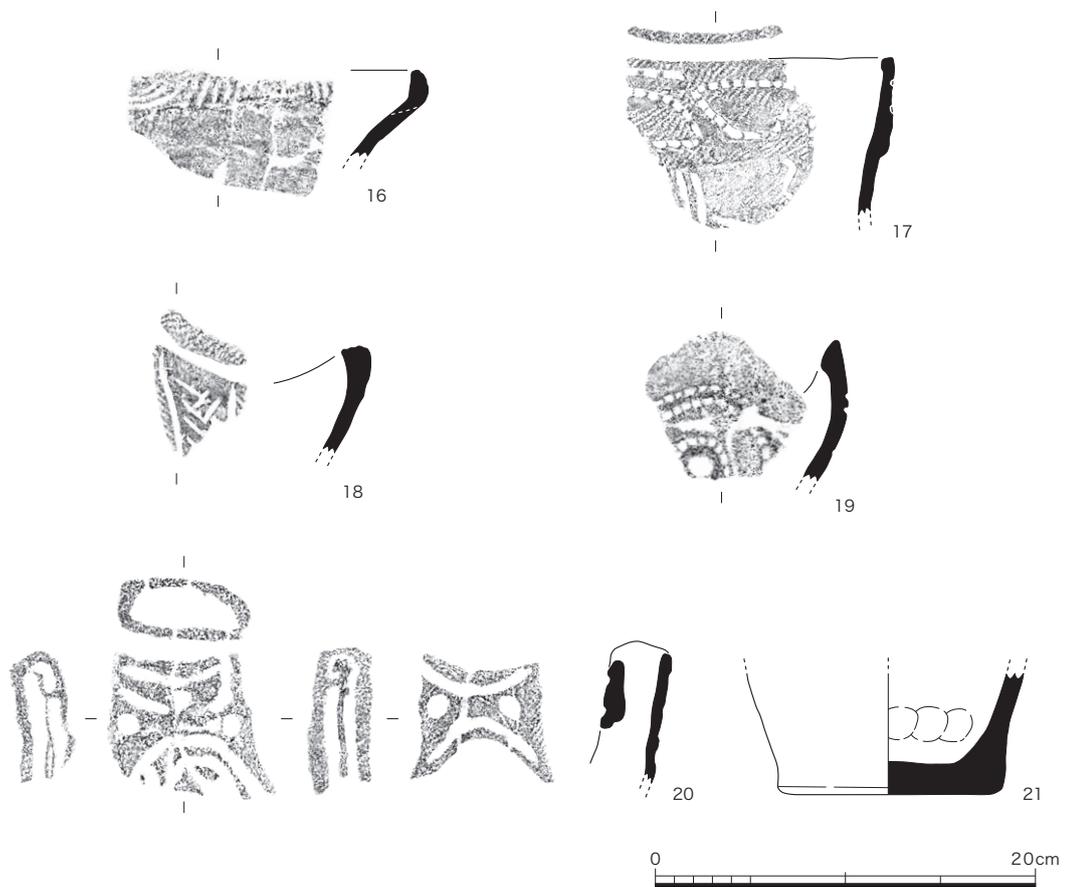
第3図 右京第975次調査 出土遺物実測図1 (1/4)

文が施されるもので、後期後葉の宮滝式土器である。8は小穴P29で出土した。12～14は注口土器である。12は元住吉山式、13・14は宮滝式土器である。15は上げ底状の底部片で、後期後葉頃の所産であろうか。

16～21（第4図）は縄文時代中期末の北白川C式土器である。いずれも第3層で出土した。16は鉢、または浅鉢の口縁部で、口縁部に弧状の沈線と刻み目状の短い沈線が認められる。17は深鉢で、口縁部は段をもつ。縄文が施され、段より上は押し引きによる半円状の区画が認められる。段より下には縦方向の沈線が認められ、直線的なものと波状に垂下するものが確認できる。18は波状口縁の深鉢で、口縁上端面に縄文が施される。外面には縦位沈線間に羽状沈線と縄文が施される。19は波状口縁の深鉢で、弧状の沈線と円形刺突が施される。20は波状口縁の深鉢で、波頂部は中空で箱状を呈する。4面とも沈線や刺突が施され、内面側と左右側面には縄文が認められる。

石器・石製品（第5～13図）

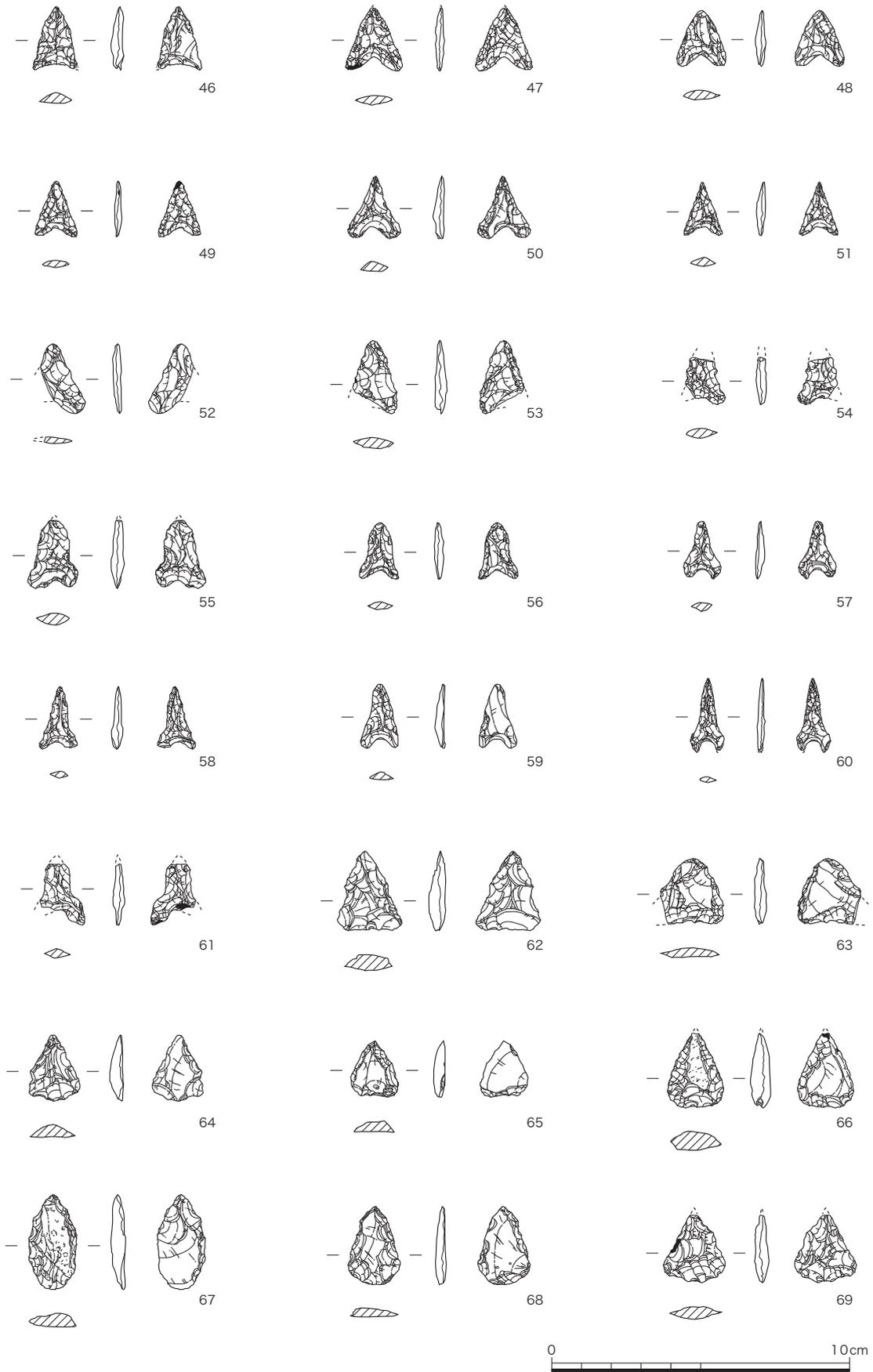
石器・石製品は遺構から出土したものはわずかで、大半は遺物包含層第2層および第3層からの出土である。これらの土層では縄文時代中期末と後期後半の土器が出土している。中期末の土器はわずかで、大半は後期後半の土器であることから、本調査で出土した土器・石製品の多くは後期後半のものと考えられる。以下では、器種ごとにまとめて記述する。



第4図 右京第975次調査 出土遺物実測図2 (1/4)



第5図 右京第975次調査 出土遺物実測図3 (1/2)



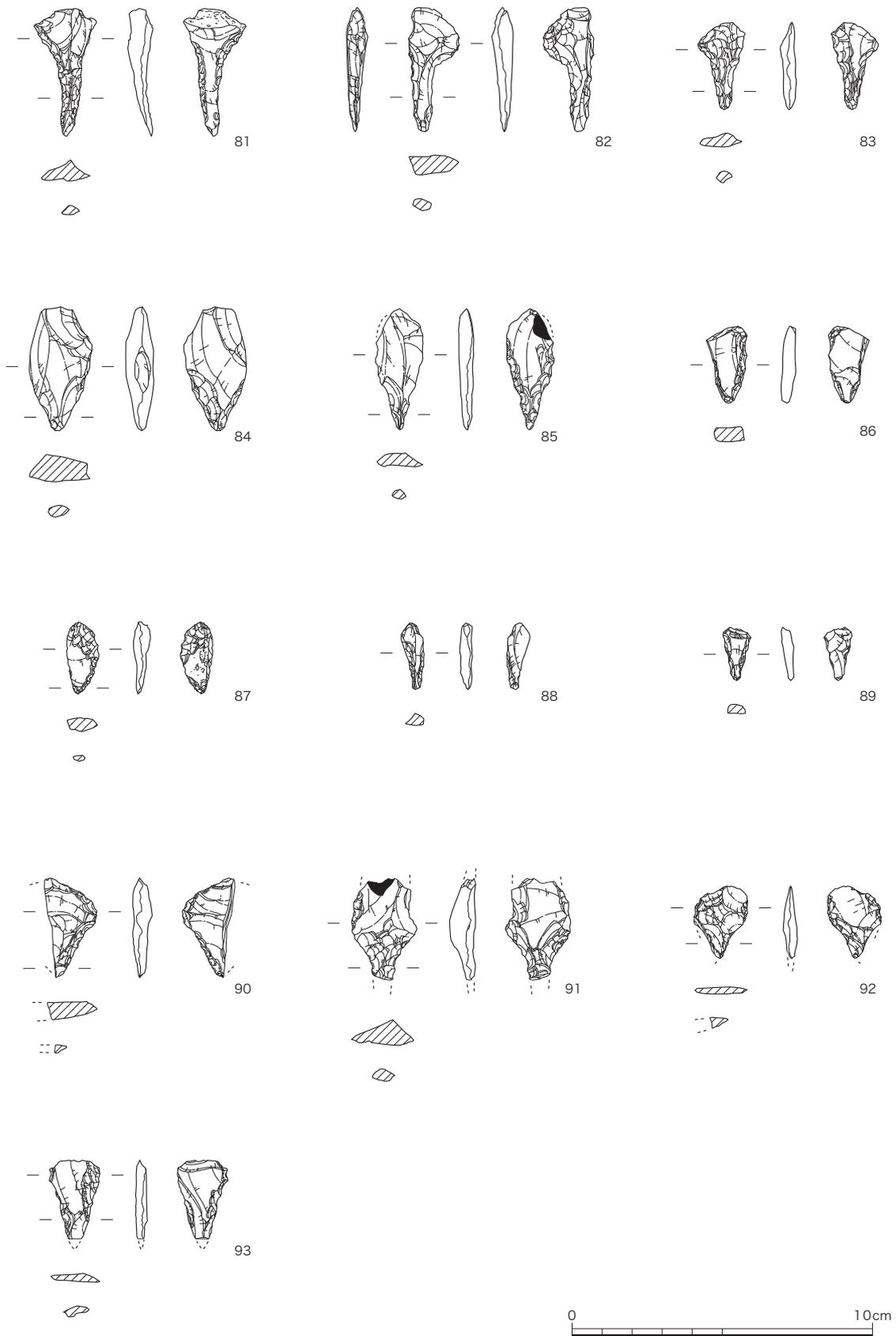
第6図 右京第975次調査 出土遺物実測図4 (1/2)

22～69（第5・6図）は石鏃である。1トレンチで出土したものは49・51・67の3点で、49はP17で出土した。その他の石鏃は全て2トレンチで出土した。2トレンチでの遺構出土は、P37で出土した59、SX25で出土した66のみである。図示できたものはいずれも無茎鏃で、凹基式、平基式、円基式のもの確認できる。凹基鏃には抉りの深いものと浅いものがあり、平面形状は長さより幅の大きいもの、長さと同幅のもの、長さが幅より大きなもの、脚部が張り出すものなどがみられる。石材はいずれもサヌカイトである。

70～80（第7図）は石鏃未成品である。1トレンチで出土したものは80のみで、他は2トレンチで出土した。遺構から出土したものは1トレンチの土坑SK30から出土した80、2トレンチの集石遺構SX14の下層で出土した78のみで、他は遺物包含層からの出土である。2トレンチの第2層では72～76、第3層では70・77が出土し、その他は第2～3層で出土した。いずれも石材はサヌカイトである。



第7図 右京第975次調査 出土遺物実測図5（1/2）



第8図 右京第975次調査 出土遺物実測図6 (1/2)

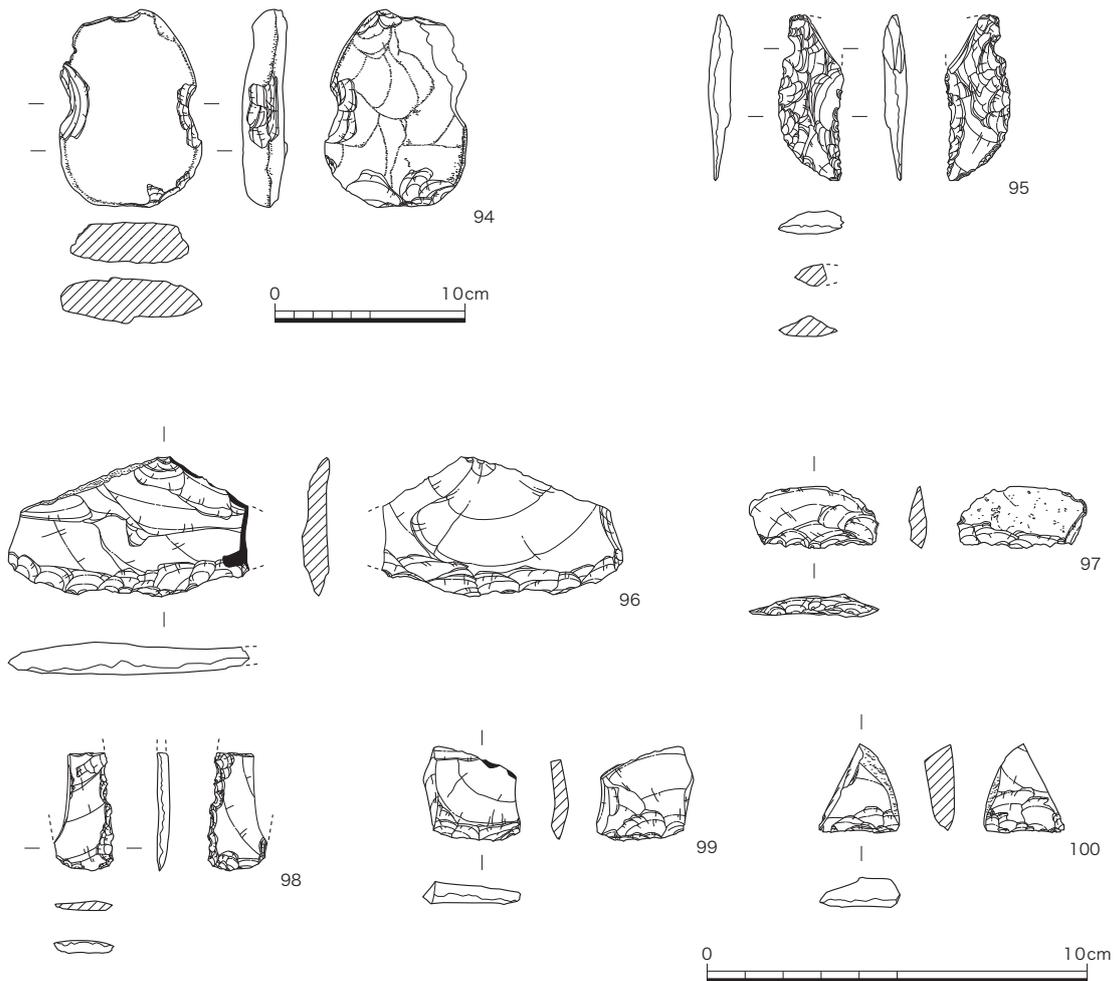
81～89は石錐、90～93はその未成品である（第8図）。81～83はつまみ状の頭部を有し、長い錐部をもつ。石材は全てサヌカイトを用いる。

94（第9図）は円礫の上下、および左右側縁に打ち欠きがみられ、形状から石錘とした。粘板岩製で、重量は237.9gである。

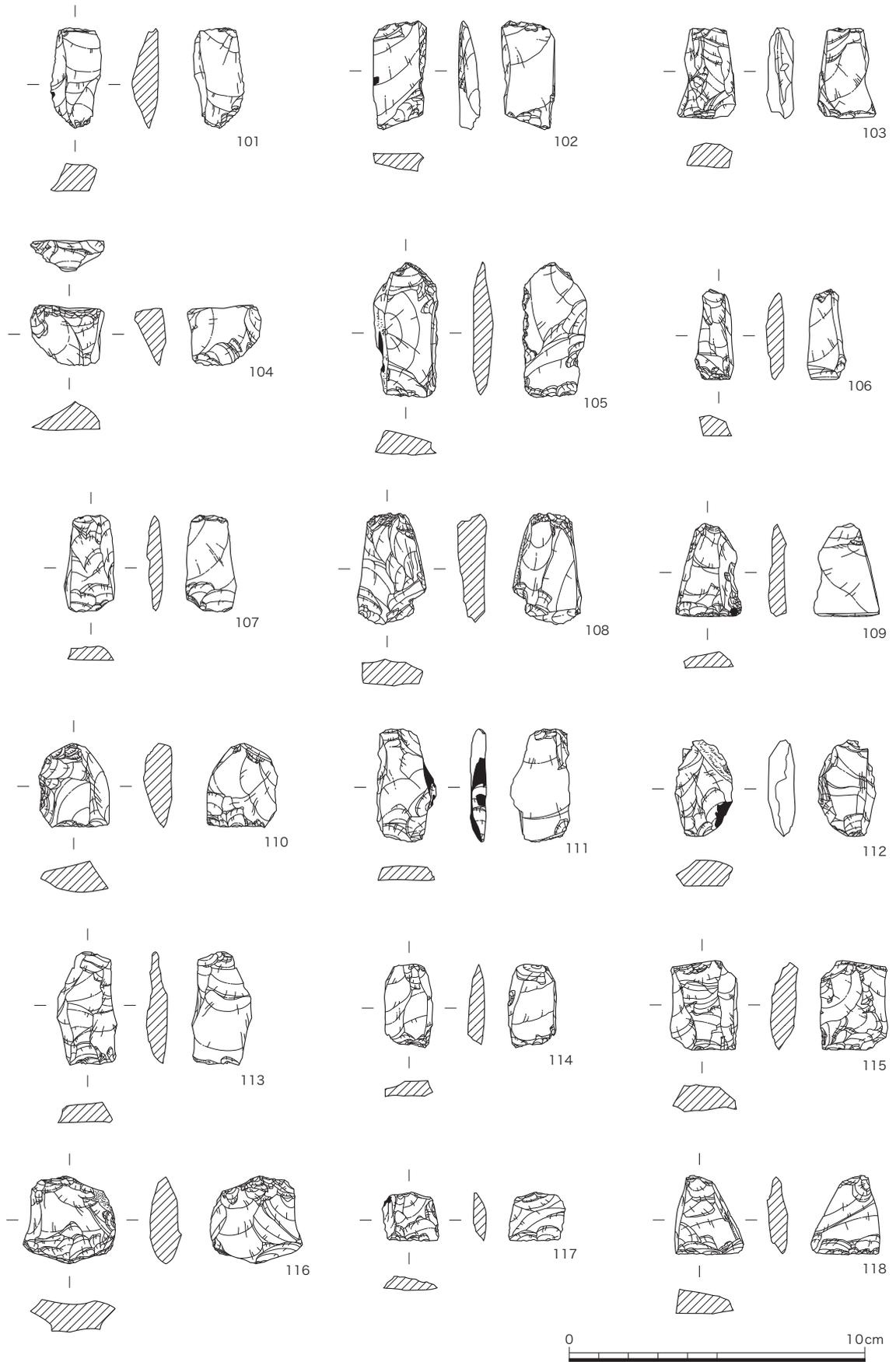
95（第9図）は石匙である。2トレンチの第1層で出土した。縦型でつまみ付近は欠損する。石材はサヌカイトである。

96～100（第9図）は削器である。99が1トレンチの壁面整形時に出土したほかは、2トレンチで出土した。97・100は第2層、96・98は第3層で出土した。97は自然面が残る。いずれも石材はサヌカイトである。

101～118（第10図）は楔形石器である。1トレンチで出土したものは101・102の2点で、その他は2トレンチで出土した。101は第3層、102は遺構精査時の出土である。2トレンチでは103が土坑SK15で出土し、ほかは遺物包含層からの出土である。104・105が第1層、106～111が第2層、112～116が第3層で出土した。117は第2～3層、118は調査区壁際の断ち割り時に出土したものである。石材はいずれもサヌカイトである。



第9図 右京第975次調査 出土遺物実測図7 (1/2・1/4)



第10図 右京第975次調査 出土遺物実測図8 (1/2)

119～123（第 11 図）は敲石・磨石である。119 は 2 トレンチの第 2 層で出土した。正・裏面、上側面と左右両側面に敲打痕が認められる。石材は砂岩である。120 は 2 トレンチの第 2 層で出土した。正・裏面の中央と右から下側面にかけて敲打によるくぼみがある。正・裏面には磨り面も認められる。石材は砂岩である。121 は 2 トレンチの第 3 層で出土した。正面および裏面の中央に敲打によるくぼみが認められる。磨り面も確認でき、正面中央付近と上側面、裏面の中央付近が使用される。石材は安山岩（玢岩）である。122 は 2 トレンチの第 3 層で出土した。上下、左右すべての側面に敲打痕が認められる。磨石としても使用されており、正・裏面に磨り面がある。石材は石英斑岩である。123 は 2 トレンチで断ち割りの際に出土した磨石で、正・裏面の両面が使用される。

124～127（第 12 図）は石皿・台石である。124 は 2 トレンチの断ち割りで出土した。側面はいずれも欠損しており、全形は不明である。正・裏面の両面に磨り面が認められる。125 は 1 トレンチの第 2 層で出土した。左・上側面側は欠損する。正・裏面とも使用痕が確認でき、右側面も磨り面の可能性がある。126 は 2 トレンチの第 3 層で出土した。小片のため本来の形状は不明である。正面は平らで、敲打によるものの可能性があるくぼみが認められたことから台石としたが、敲石として使用されたものかもしれない。127 は 2 トレンチの第 2 層で出土した。裏面および上側面側以外は欠損している。正面は平坦で、磨り面と敲打痕が認められる。石材はいずれも砂岩である。

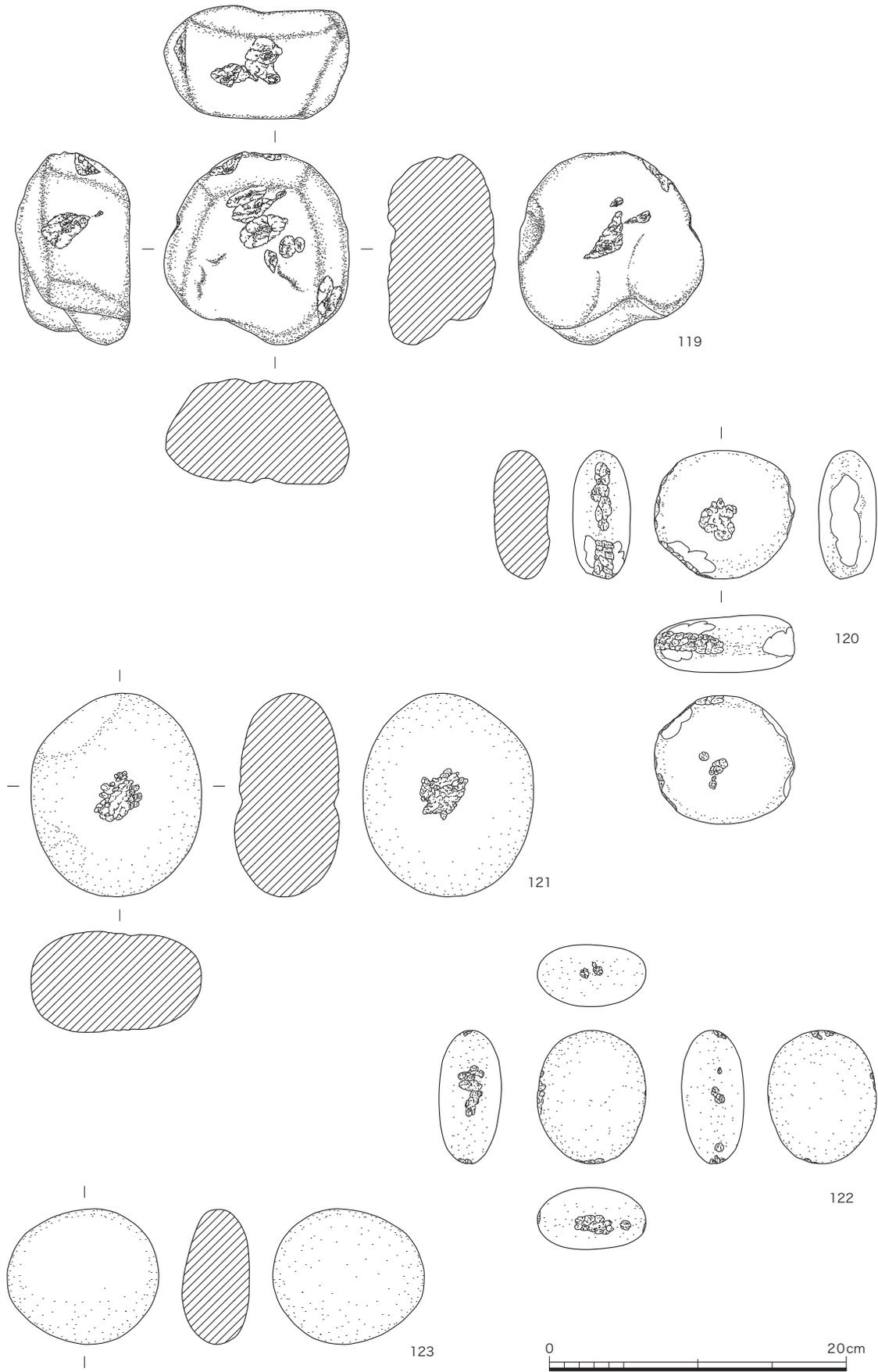
128～133（第 13 図）は碧玉製の玉類である。成形は粗く、穿孔も未貫通であることから未成品と考えられる。128 は長方形状を呈し、片面からの穿孔が認められる。孔は未貫通で、石材のやや上方より穿たれる。129 は片側からの穿孔が認められ、未貫通である。130～133 は両側からの穿孔である。131 以外は未貫通で、133 は孔の断面にズレが認められる。いずれも孔周辺で欠損していることから、穿孔時の破損により廃棄されたものと考えられる。

134（第 13 図）は石棒とした。2 トレンチの第 3 層で出土した。石材は結晶片岩で、上端、および下端は欠損している。

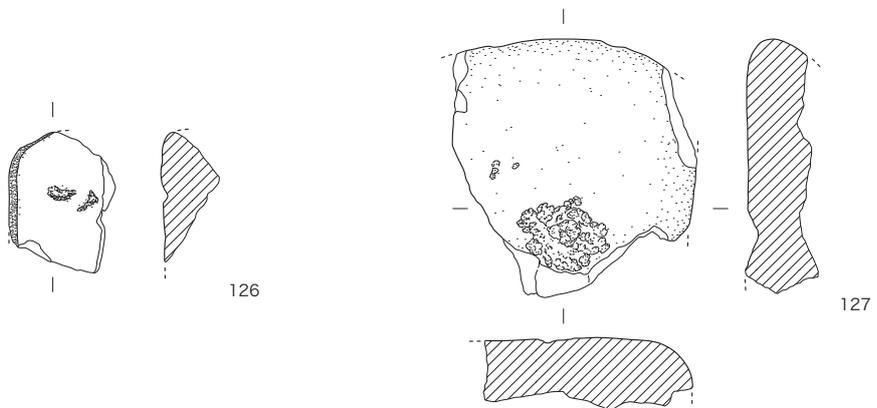
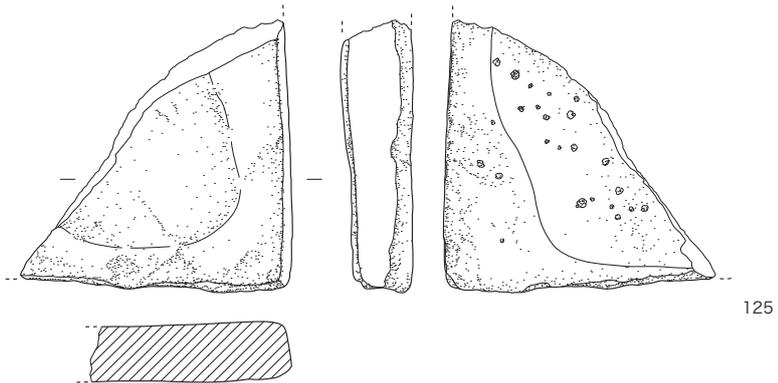
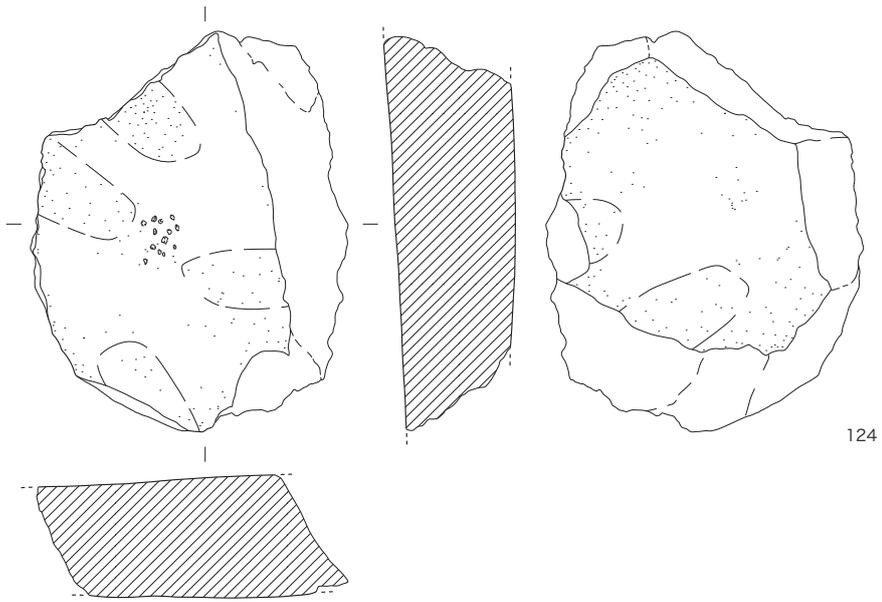
135（第 13 図）は 2 トレンチの第 3 層で出土した煙水晶の剥片で、二次加工が認められる。

136（第 13 図）は 1 トレンチの第 2 層上面で出土した。研磨の痕跡は明瞭ではなく、石鏃の可能性もあるが、鏃身の丸みを帯びた形状や、チャートを用いていることなどから、異形局部磨製石器とした。周辺の調査では、下海印寺遺跡で異形局部磨製石器の可能性のあるものが出土している（岩崎 2007）。下海印寺遺跡は、本遺跡と一部重複して西側に広がる旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、縄文時代では早期の押型文土器や後期の土器・石器が出土している。

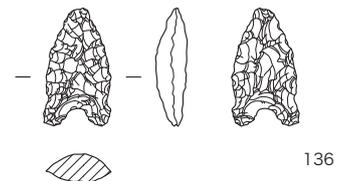
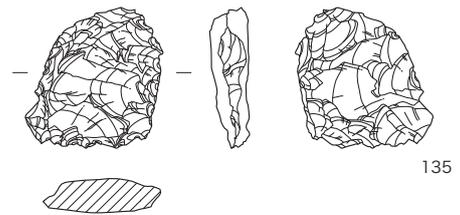
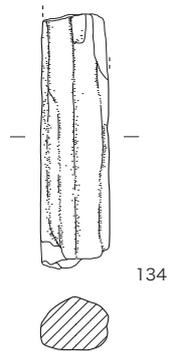
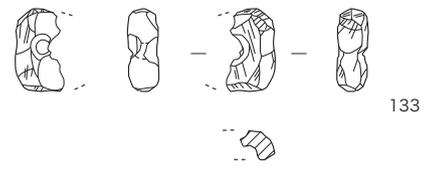
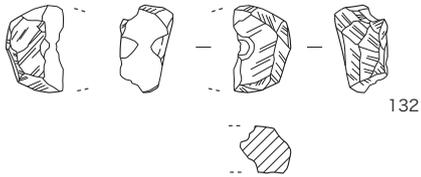
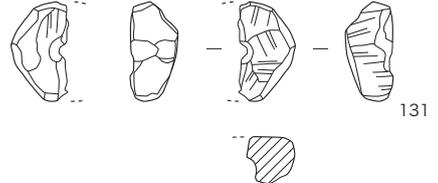
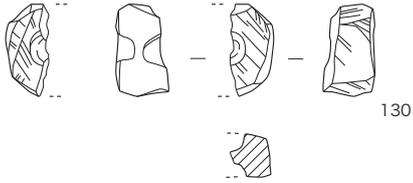
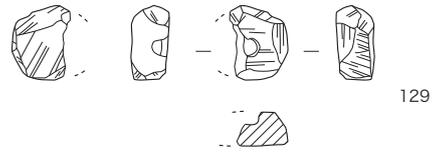
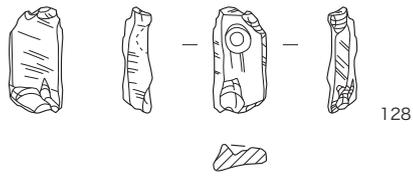
石器・石製品については、法量や石材を付表 2 にまとめた。サヌカイトの産地については肉眼観察による推定である。玉類と磨石・石皿などの礫石器の石材については、高田クリスタルミュージアム（京都市）の高田雅介氏にご教示いただいた。



第11図 右京第975次調査 出土遺物実測図9 (1/4)



第12図 右京第975次調査 出土遺物実測図10 (1/4)



第13図 右京第975次調査 出土遺物実測図11 (1/1・1/2・1/4)

付表-2 右京第975次調査 出土石器・石製品観察表

| 番号 | 出土位置・層位 | 器種 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (cm) | 重量 (g) | 石材・備考 |
|----|----------------|----|------------|-----------|------------|-----------|------------------------|
| 22 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 2.3 | 2.1 | 0.3 | 0.9 | サヌカイト(金山) |
| 23 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 2.2 | 2.2 | 0.4 | 1.5 | サヌカイト(二上山) |
| 24 | 2トレンチ 断割 | 石鏃 | 1.8 | 2.3 | 0.3 | 0.8 | サヌカイト(金山) |
| 25 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 1.7 | 1.8 | 0.3 | 0.5 | サヌカイト(金山) 全体に風化している |
| 26 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 1.9 | 2.0 | 0.2 | 0.7 | サヌカイト(金山) |
| 27 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 1.9 | 1.5 | 0.35 | 0.9 | サヌカイト(金山) |
| 28 | 2トレンチ 第2～3層 | 石鏃 | 1.3 | 1.4 | 0.3 | 0.3 | サヌカイト(二上山) |
| 29 | 2トレンチ 第2～3層 | 石鏃 | 1.1 | 1.2 | 0.2 | 0.3 | サヌカイト(二上山) |
| 30 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 1.3 | 1.1 | 0.2 | 0.2 | サヌカイト(二上山) |
| 31 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 1.3 | 1.3 | 0.2 | 0.2 | サヌカイト(金山) |
| 32 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 1.3 | 1.4 | 0.3 | 0.5 | サヌカイト(二上山) |
| 33 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 1.3 | 1.4 | 0.3 | 0.3 | サヌカイト(金山) |
| 34 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 3.0 | 2.0 | 0.4 | 1.9 | サヌカイト(二上山) |
| 35 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 2.4 | 2.0 | 0.4 | 1.2 | サヌカイト(二上山) |
| 36 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 2.4 | 1.6 | 0.3 | 0.8 | サヌカイト(二上山) |
| 37 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 2.8 | 2.0 | 0.4 | 1.8 | サヌカイト(二上山) |
| 38 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 2.4 | 1.9 | 0.4 | 1.1 | サヌカイト(金山) |
| 39 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 2.6 | 2.1 | 0.5 | 1.7 | サヌカイト(二上山) |
| 40 | 2トレンチ 第2～3層 | 石鏃 | (2.2) | (1.6) | 0.35 | 1.2 | サヌカイト(金山) |
| 41 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 2.5 | 1.8 | 0.3 | 0.9 | サヌカイト(二上山) |
| 42 | 2トレンチ 第2～3層 | 石鏃 | (2.15) | 1.5 | 0.35 | 0.9 | サヌカイト(金山) |
| 43 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 2.1 | 1.6 | 0.4 | 0.7 | サヌカイト(二上山) |
| 44 | 2トレンチ 2層 | 石鏃 | 2.0 | 1.7 | 0.3 | 0.5 | サヌカイト(二上山) |
| 45 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 2.1 | 1.7 | 0.3 | 1.0 | サヌカイト(金山) |
| 46 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 2.15 | 1.5 | 0.45 | 1.0 | サヌカイト(二上山) |
| 47 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | (2.1) | 2.0 | 0.3 | 0.8 | サヌカイト(二上山) |
| 48 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 1.9 | 1.6 | 0.3 | 0.8 | サヌカイト(金山) 全体に風化している |
| 49 | 1トレンチ P17 | 石鏃 | 1.9 | 1.4 | 0.3 | 0.5 | サヌカイト(二上山) |

| 番号 | 出土位置・層位 | 器種 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (cm) | 重量 (g) | 石材・備考 |
|----|-------------------|-------|------------|-----------|------------|-----------|--------------------------|
| 50 | 2トレンチ 精査 | 石鏃 | 2.1 | 1.8 | 0.4 | 0.9 | サヌカイト(二上山) |
| 51 | 1トレンチ 第2～3層 | 石鏃 | 1.8 | 1.3 | 0.3 | 0.4 | サヌカイト(二上山) 全体に風化している |
| 52 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 2.45 | (1.5) | 0.25 | 0.7 | サヌカイト(金山) |
| 53 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | (2.5) | (1.5) | 0.4 | 1.1 | サヌカイト(金山) |
| 54 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | (1.6) | (1.35) | 0.35 | 0.7 | サヌカイト(金山) |
| 55 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | (2.3) | 1.7 | 0.4 | 1.3 | サヌカイト(二上山) |
| 56 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 1.9 | 1.3 | 0.25 | 0.6 | サヌカイト(金山) 全体に風化している |
| 57 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 1.9 | 1.2 | 0.3 | 0.4 | サヌカイト(二上山) |
| 58 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 2.1 | 1.3 | 0.2 | 0.5 | サヌカイト(金山) |
| 59 | 2トレンチ P37 | 石鏃 | 2.2 | 1.3 | 0.2 | 0.6 | サヌカイト(二上山) |
| 60 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 2.5 | 1.2 | 0.2 | 0.4 | サヌカイト(二上山) |
| 61 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | (2.05) | (1.55) | 0.4 | 0.8 | サヌカイト(金山) |
| 62 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 2.65 | 2.15 | 0.6 | 2.4 | サヌカイト(金山) |
| 63 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | (2.2) | (2.1) | 0.4 | 2.0 | サヌカイト(金山) |
| 64 | 2トレンチ 精査 | 石鏃 | 2.25 | 1.7 | 0.45 | 1.5 | サヌカイト(二上山) |
| 65 | 2トレンチ 第2～3層 | 石鏃 | 1.9 | 1.6 | 0.4 | 1.2 | サヌカイト(二上山) |
| 66 | 2トレンチ SX25 | 石鏃 | (2.55) | 1.9 | 0.7 | 3.4 | サヌカイト(二上山) |
| 67 | 1トレンチ 第3層 | 石鏃 | 3.2 | 1.6 | 0.5 | 2.7 | サヌカイト(二上山) |
| 68 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 2.65 | 1.75 | 0.35 | 1.6 | サヌカイト(金山) |
| 69 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | (2.3) | 1.1 | 0.5 | 1.9 | サヌカイト(二上山) |
| 70 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃未成品 | (2.25) | (1.25) | 0.3 | 0.5 | サヌカイト(金山か) |
| 71 | 2トレンチ 第2～3層 | 石鏃未成品 | 2.4 | 1.95 | 0.4 | 1.4 | サヌカイト(二上山) |
| 72 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃未成品 | (2.5) | (1.8) | 0.4 | 1.0 | サヌカイト(金山か) |
| 73 | 2トレンチ 第2層(排土中) | 石鏃未成品 | 2.3 | 1.8 | 0.45 | 1.5 | サヌカイト(二上山) |
| 74 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃未成品 | (2.0) | 1.8 | 0.5 | 1.8 | サヌカイト(金山) |
| 75 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃未成品 | 2.4 | (1.5) | 0.4 | 1.6 | サヌカイト(二上山) |
| 76 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃未成品 | 2.15 | 2.0 | 0.5 | 1.8 | サヌカイト(金山か) 全体的に風化している |
| 77 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃未成品 | 3.1 | 1.95 | 0.5 | 3.0 | サヌカイト(二上山) |
| 78 | 2トレンチ SX14下層 | 石鏃未成品 | 2.3 | 1.35 | 0.45 | 1.4 | サヌカイト(二上山) |

| 番号 | 出土位置・層位 | 器種 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (cm) | 重量 (g) | 石材・備考 |
|-----|-----------------|-------|------------|-----------|------------|-----------|-------------|
| 79 | 2トレンチ 第2～3層 | 石鏃未成品 | (2.3) | (1.65) | 0.5 | 1.6 | サヌカイト(産地不明) |
| 80 | 1トレンチ SK30西半 | 石鏃未成品 | 3.75 | (2.0) | 0.6 | 3.5 | サヌカイト(金山か) |
| 81 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 4.25 | 2.05 | 0.85 | 3.1 | サヌカイト(二上山) |
| 82 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 4.2 | 1.7 | 3.3 | 3.3 | サヌカイト(金山) |
| 83 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 2.9 | 1.55 | 0.55 | 1.6 | サヌカイト(金山) |
| 84 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 4.2 | 2.0 | 0.9 | 8.1 | サヌカイト(二上山) |
| 85 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 4.05 | 1.6 | 0.5 | 2.8 | サヌカイト(二上山) |
| 86 | 2トレンチ 第2層 | 石鏃 | 2.6 | 1.4 | 0.5 | 2.1 | サヌカイト(金山) |
| 87 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 2.4 | 1.05 | 0.55 | 1.4 | サヌカイト(二上山) |
| 88 | 2トレンチ | 石鏃 | 2.2 | 0.8 | 0.4 | 0.7 | サヌカイト(金山) |
| 89 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃 | 1.8 | 0.9 | 0.3 | 0.6 | サヌカイト(金山) |
| 90 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃未成品 | (3.35) | (1.75) | 0.65 | 3.1 | サヌカイト(金山) |
| 91 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃未成品 | (3.4) | 2.15 | 0.85 | 4.9 | サヌカイト(二上山) |
| 92 | 2トレンチ 第3層 | 石鏃未成品 | (2.4) | 1.8 | 0.5 | 1.5 | サヌカイト(金山) |
| 93 | 1トレンチ 第1層 | 石鏃未成品 | (2.65) | 1.7 | 0.4 | 1.6 | サヌカイト(金山) |
| 94 | 2トレンチ 断割 | 石錘 | 10.5 | 7.5 | 2.4 | 237.9 | 粘板岩 |
| 95 | 2トレンチ 第1層 | 石匙 | 4.4 | 1.7 | 0.65 | 4.4 | サヌカイト(二上山) |
| 96 | 2トレンチ 第3層 | 削器 | 3.7 | 6.3 | 0.7 | 20.5 | サヌカイト(金山) |
| 97 | 2トレンチ 第2層 | 削器 | 1.65 | 3.4 | 0.6 | 2.8 | サヌカイト(二上山) |
| 98 | 2トレンチ 第3層 | 削器 | (3.15) | (1.55) | 0.3 | 2.0 | サヌカイト(二上山) |
| 99 | 1トレンチ 壁面整形 | 削器 | 2.5 | 2.6 | 0.5 | 3.9 | サヌカイト(二上山) |
| 100 | 2トレンチ 第2層 | 削器 | 2.4 | 2.1 | 0.8 | 3.6 | サヌカイト(二上山) |
| 101 | 1トレンチ 第3層 | 楔形石器 | 3.4 | 1.6 | 0.95 | 6.0 | サヌカイト(二上山) |
| 102 | 1トレンチ 精査 | 楔形石器 | 3.7 | 1.8 | 0.6 | 5.7 | サヌカイト(金山) |
| 103 | 2トレンチ SK15 | 楔形石器 | 3.1 | 2.0 | 0.9 | 6.5 | サヌカイト(金山) |
| 104 | 2トレンチ 第1層 | 楔形石器 | 2.1 | 2.5 | 1.1 | 5.4 | サヌカイト(二上山) |
| 105 | 2トレンチ 第1層 | 楔形石器 | 4.6 | 2.2 | 0.85 | 9.8 | サヌカイト(金山) |
| 106 | 2トレンチ 第2層 | 楔形石器 | 3.1 | 1.3 | 0.7 | 3.2 | サヌカイト(金山) |
| 107 | 2トレンチ 第2層 | 楔形石器 | 3.3 | 1.7 | 0.5 | 3.7 | サヌカイト(金山) |

| 番号 | 出土位置・層位 | 器種 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (cm) | 重量 (g) | 石材・備考 |
|-----|--------------------|-----------|------------|-----------|------------|-----------|------------|
| 108 | 2トレンチ 第2層 | 楔形石器 | 3.8 | 2.3 | 1.0 | 10.4 | サヌカイト(金山) |
| 109 | 2トレンチ 第2層 | 楔形石器 | 3.2 | 2.2 | 0.6 | 5.0 | サヌカイト(金山) |
| 110 | 2トレンチ 第2層 | 楔形石器 | 2.85 | (2.4) | 1.1 | 8.0 | サヌカイト(二上山) |
| 111 | 2トレンチ 第2層 | 楔形石器 | 3.9 | 2.0 | 0.5 | 5.9 | サヌカイト(金山) |
| 112 | 2トレンチ 第3層 | 楔形石器 | 3.3 | 2.0 | 0.9 | 6.5 | サヌカイト(二上山) |
| 113 | 2トレンチ 第3層 | 楔形石器 | 3.8 | 2.0 | 0.7 | 6.2 | サヌカイト(金山) |
| 114 | 2トレンチ 第3層 | 楔形石器 | 2.9 | 1.7 | 0.6 | 3.6 | サヌカイト(金山) |
| 115 | 2トレンチ 第3層 | 楔形石器 | 3.0 | 2.3 | 0.9 | 8.1 | サヌカイト(二上山) |
| 116 | 2トレンチ 第3層 | 楔形石器 | 3.0 | 3.2 | 1.1 | 12.3 | サヌカイト(二上山) |
| 117 | 2トレンチ 第2～3層 | 楔形石器 | 1.7 | 1.9 | 0.5 | 1.8 | サヌカイト(金山) |
| 118 | 2トレンチ 断割 | 楔形石器 | 2.7 | 2.3 | 0.8 | 5.5 | サヌカイト(金山) |
| 119 | 2トレンチ 第2層 | 敲石 | 13.1 | 12.5 | 7.7 | 1688.0 | 砂岩 |
| 120 | 2トレンチ 断割 第2層 | 敲石・磨石 | 9.45 | 8.7 | 3.9 | 472.5 | 砂岩 |
| 121 | 2トレンチ 第3層 | 敲石・磨石 | 13.8 | 11.5 | 7.05 | 1726 | 安山岩(玢岩) |
| 122 | 2トレンチ 第3層 | 敲石・磨石 | 9.05 | 7.3 | 4.2 | 384.5 | 石英斑岩 |
| 123 | 2トレンチ 断割 | 磨石 | 9.2 | 10.2 | 4.55 | 602.5 | 石英斑岩 |
| 124 | 2トレンチ 断割 第2層 | 石皿 | (21.25) | (16.7) | 7.0 | 3341.5 | 砂岩 |
| 125 | 1トレンチ 北断割 第2層 | 石皿 | (14.45) | (13.3) | 3.8 | 88.55 | 砂岩 |
| 126 | 2トレンチ 第3層 | 台石か | (7.5) | (5.6) | (3.1) | 121.3 | 砂岩 |
| 127 | 2トレンチ 第2層 | 石皿 | (13.7) | (12.85) | (3.8) | 867.0 | 砂岩 |
| 128 | 2トレンチ 第2層 | 玉未成品 | 1.4 | 0.7 | 0.4 | 0.5 | 碧玉 |
| 129 | 2トレンチ 第2～3層 | 玉未成品 | 1.0 | (0.75) | 0.5 | 0.5 | 碧玉 |
| 130 | 2トレンチ 第2～3層 | 玉未成品 | 1.2 | 0.6 | 0.7 | 0.7 | 碧玉 |
| 131 | 2トレンチ 第2～3層 | 玉未成品 | 1.3 | 0.75 | 0.65 | 0.9 | 碧玉 |
| 132 | 2トレンチ 第2～3層 | 玉未成品 | 1.15 | (0.75) | 0.7 | 0.7 | 碧玉 |
| 133 | 2トレンチ 第3層 | 玉未成品 | 1.1 | (0.65) | 0.45 | 0.4 | 碧玉 |
| 134 | 2トレンチ 第3層 | 石棒 | (13.5) | 3.6 | 2.8 | 260.4 | 結晶片岩 |
| 135 | 2トレンチ 第3層 | 二次加工のある剥片 | 3.7 | 3.6 | 1.05 | 15.1 | 煙水晶 |
| 136 | 1トレンチ 断割(第2層上面) | 異形局部磨製石器 | 3.15 | 1.75 | 0.85 | 4.5 | チャート(ブルー) |

2 長岡京跡右京第 1016 次調査 (7ANOOD - 11 地区) 出土遺物

右京第 1016 次調査では東西 2 か所の調査区を設定し、東側を 1 トレンチ、西側を 2 トレンチとした。遺物は主に 2 トレンチで出土し、基本層序第 4・8・9・11・12 層で出土した。遺物の出土が最も多いのは第 4 層である。第 14 図に図示したものは、すべて 2 トレンチで出土した。

土 器

137～152 は須恵器である。137 は杯 H 蓋で、口径は 10.6cm である。外面には自然釉が付着する。138 は杯 H である。口径は 9.3cm で、焼成はやや軟質である。137・138 は飛鳥時代の所産である。139・140 は杯 A の底部片である。139 は灰白色で軟質に焼成されている。140 は内外面に火襷が認められる。141～144 は杯 B 蓋、145～150 は杯 B である。141 は灰白色を呈する軟質の焼成である。142・143 は口縁端部から体部にかけての形状がなだらかに仕上げられる。口径は 142 が 13.1cm、143 は 15cm、144 は 16.2cm である。146 は床土 II からの出土である。148 は高台が底部の中心寄りに貼り付けられる。150 は口径 15.2cm、器高 3.7cm、底径 10.2cm を測る。151 は壺の底部とみられる。平底で底部付近に 3 条の沈線がめぐり、152 は高杯の裾部である。外面には自然釉が付着する。153～156 は土師器である。153 は杯 B で、底部内面には暗文が確認できる。胎土は精良で、赤灰色を呈する。154・155 は甕の口縁部である。小片のため口径は不明である。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケ調整である。156 は甕、もしくは甗の把手である。157・158 は土坑 SK05 で出土した製塩土器である。158 は口径 9.8cm である。171・172 は縄文時代の土器である。171 は深鉢とみられ、口縁部外面に 5 条の沈線が認められ、内面には肥厚した口縁端部下に 1 条の沈線がめぐり、172 は小片のため部位や天地は不明である。外面には沈線が認められる。後期後半に位置づけられようか。173 は底部片である。底径は 4.0cm、灰褐色を呈する。弥生土器の可能性もある。

土器は縄文時代から平安時代にかけてのものが確認できるが、主体となるのは奈良時代～長岡京期のものである。

瓦

瓦は 1 点図示できた。159 は丸瓦の玉縁部で、凹面には布目が認められる。胎土は砂粒が多く粗い。表面には煤が吸着する。

土 製 品

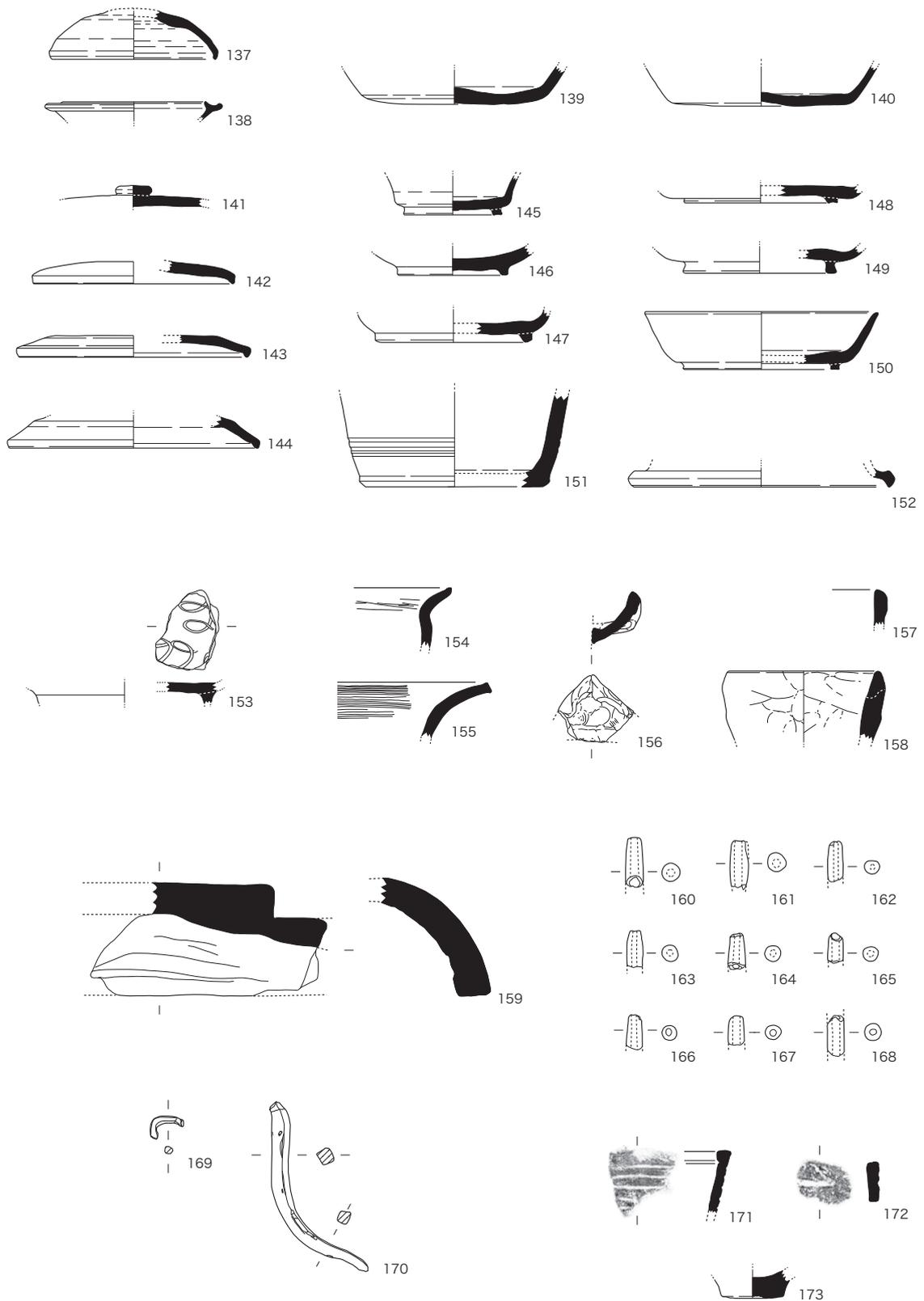
160～168 は土錘である。いずれも破損しており、全形の分かるものはない。その他、フイゴや炉壁とみられる小片が少量出土した。

石 器 類

耕作土を含め、各層でサヌカイトの剥片等が出土している。

金属製品

169・170 は鉄製品である。169 は 4 層で出土した。C 字状に屈曲しており、断面は多角形状である。170 は床土 II で出土した。断面は方形を呈しており、釘とみられる。



床土II～4層 - 140・145・146・149・150・162・170
 SK05 - 157・158
 8層 - 171 (他は全て4層出土)

0 20cm

第14図 右京第1016次調査 出土遺物実測図 (1/4)

3 長岡京跡右京第 1033 次調査 (7ANOOD - 12 地区) 出土遺物

右京第 1033 次調査では東西に 2 か所の調査区を設定し、東側を 1 トレンチ、西側を 2 トレンチとした。遺物包含層は第 1～3 層までの 3 層あり、各層で飛鳥時代や奈良時代から長岡京期にかけての土器が出土し、古墳時代や縄文時代の遺物もわずかに含んでいた。174～177・190・193・195～197・202 は 1 トレンチ、他は 2 トレンチからの出土である。遺構から出土したものはわずかで、大半は遺物包含層からの出土である (第 15 図)。

土 器

174～178 は土師器である。174 は杯 C である。体部外面は横方向のミガキ、底部内面には放射状暗文が施される。胎土は精良で赤灰色を呈する。飛鳥時代の所産であろう。175 は皿の底部とみられ、線刻が認められる。176・177 は甕である。176 は口径 20.2cm、飛鳥時代か。177 は長岡京期とみられ、球形の体部にくの字に外反する口縁部が付く。口縁部～頸部内面はハケ調整、体部内面は同心円当て具痕が認められる。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はタタキの後、ハケ調整が施される。177 は SX06 で出土したもので、浅い土坑に伏せた状態で埋納されており、内部には銭貨が少なくとも 10 点以上含まれていた。178 は甕、または甗の把手である。179～190 は須恵器である。179・180 は杯 G 蓋で、飛鳥時代後半に位置づけられる。181・182 は杯 A、183～188 は杯 B および蓋である。飛鳥～奈良時代のものと考えられるが、一部は長岡京期に下る可能性がある。189 は壺である。外面にはタタキが施され、頸部には工具の端部とみられる圧痕が認められる。190 は甕の口縁部である。いずれも時期は特定しえない。191・192 は製塩土器である。奈良時代～長岡京期と考えられる。193～198 は古代以外の土器をまとめた。193 は古墳時代の杯身で TK47 型式に比定できよう。194～198 は縄文時代の土器である。194 は無文の深鉢、195 は胴部片、196～198 は底部片である。

本調査で出土した土器のうち、主体となるのは奈良時代から長岡京期にかけてのもので、右京第 1016 次調査と同様の傾向にある。

金属製品

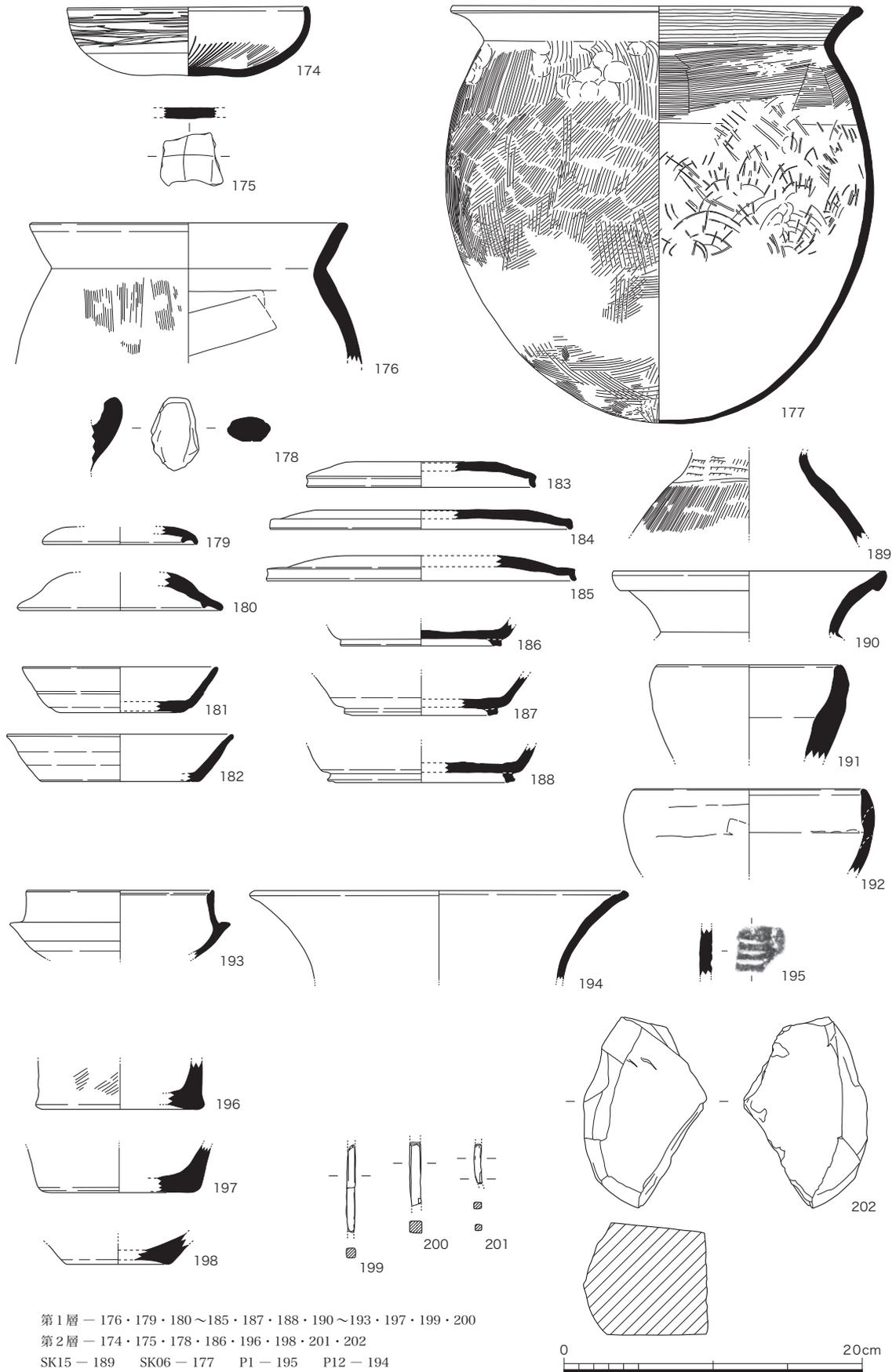
199～201 は鉄製の釘である。金属製品には、そのほかに SX06 に埋納された甕 (177) の内部で出土した銭貨がある。5 点が錆で固着したもの、3 点が錆で固着したものと、単独で出土したもの、破片のものがある。銭種が明らかなものは萬年通寶が 1 点、神功開寶が 2 点確認できるが、いずれも銅の成分がほとんど溶け出し、白色化している。鉄滓も少量確認できた。

石 製 品

202 は砥石である。石材は砂岩で、正面・裏面の両面が使用される。側縁は被熱のためか表面が剥離している。第 1～2 層では、サヌカイトやチャートの剥片も少量出土しており、石錐や削器、楔形石器の可能性もあるものも認められる。

そ の 他

瓦や炉壁とみられる細片も少量出土した。



第15図 右京第1033次調査 出土遺物実測図 (1/4)

4 長岡京跡右京第 1078 次調査 (7ANOOD - 14 地区) 出土遺物

右京第 1078 次調査では、掘立柱建物や土坑、小穴などから古代・縄文時代の土器が出土している。掘立柱建物等の遺構は近年実施された右京第 1180 次調査 (岩崎 2020) で未確認の範囲が調査され、規模や形状が明らかとなった。縄文時代中期末の浅い落ち込みとされた SX01 は、同調査によって南半分が検出され、土坑として認識されているため本報告でも土坑 SX01 と呼称する。

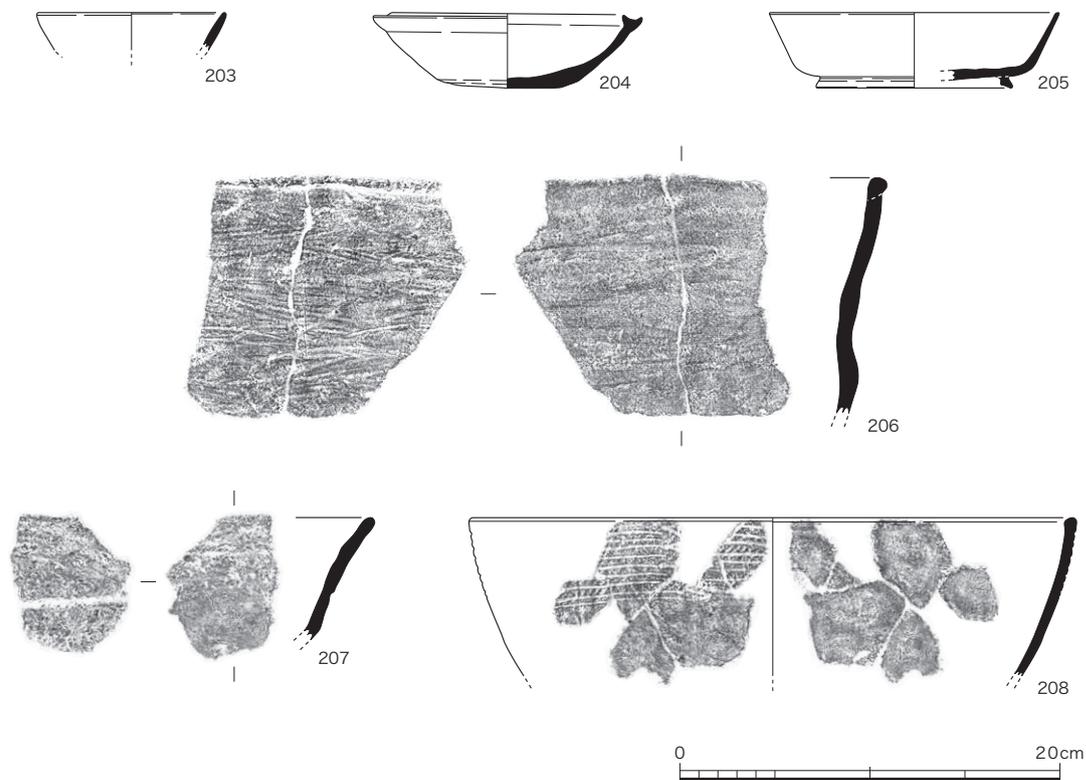
土 器 (第 16 ~ 20 図)

203・204 は飛鳥時代の土器で、掘立柱建物 SB03 の柱穴 P7 から出土した。203 は土師器の杯とみられ、口径は 10cm である。204 は須恵器の杯 H で、口径 12cm、器高 4cm である。205 は小穴 P3 で出土した杯 B である。飛鳥時代末～奈良時代の所産と考えられる。

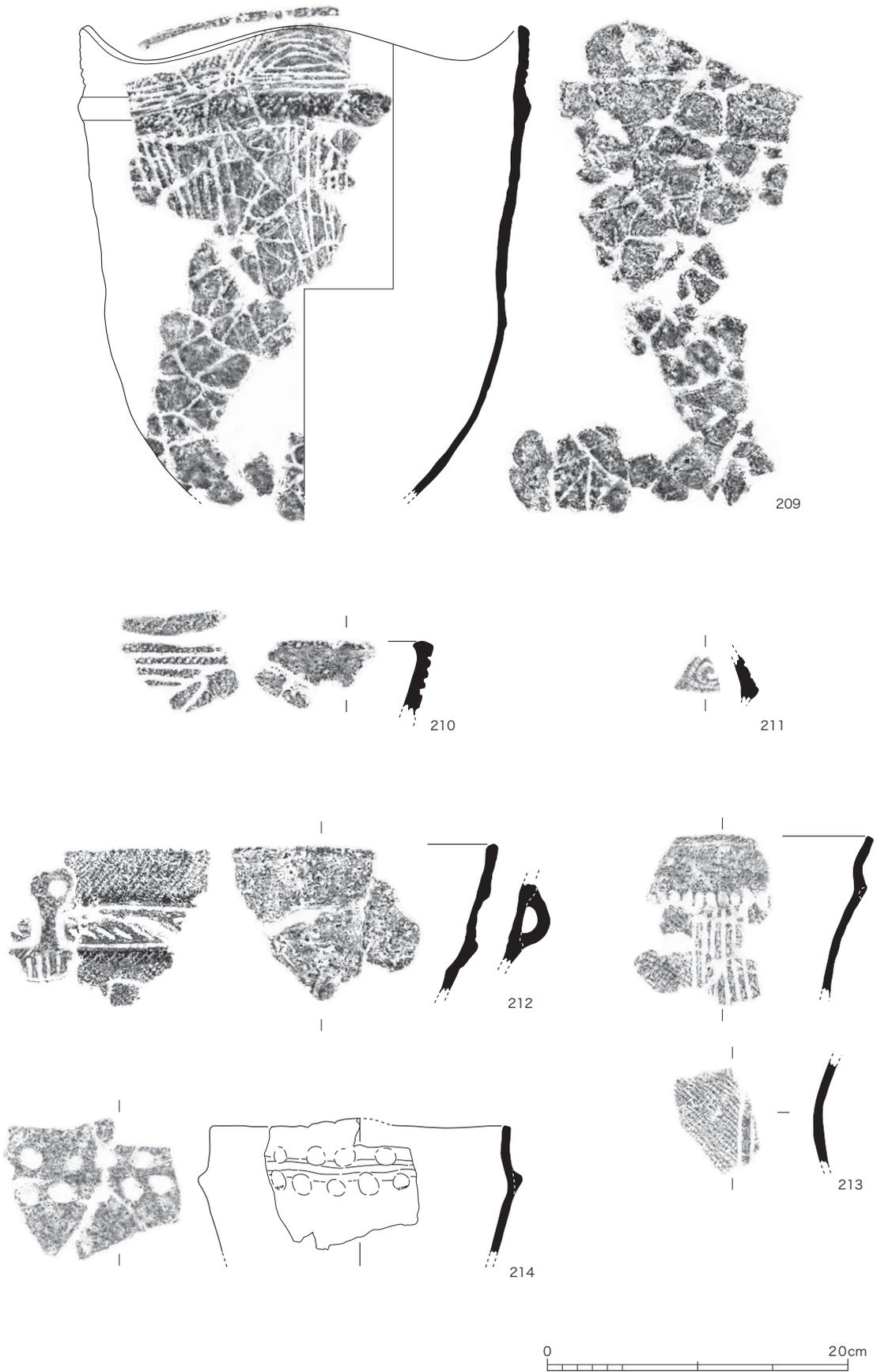
206 ~ 235 は縄文時代の土器・土製品である。

206・207 は小穴 P45 で出土した。206 は深鉢で口縁端部がやや肥厚する。胴部外面は巻貝条痕が施される。207 は無文の口縁部下に沈線が 1 条めぐり、胴部は縄文が施される。縄文時代後期前葉の北白川上層式土器である。208 は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は内傾する面をもつ。縄文施文の後、沈線が施されるもので、北白川上層式 3 期に位置づけられる。

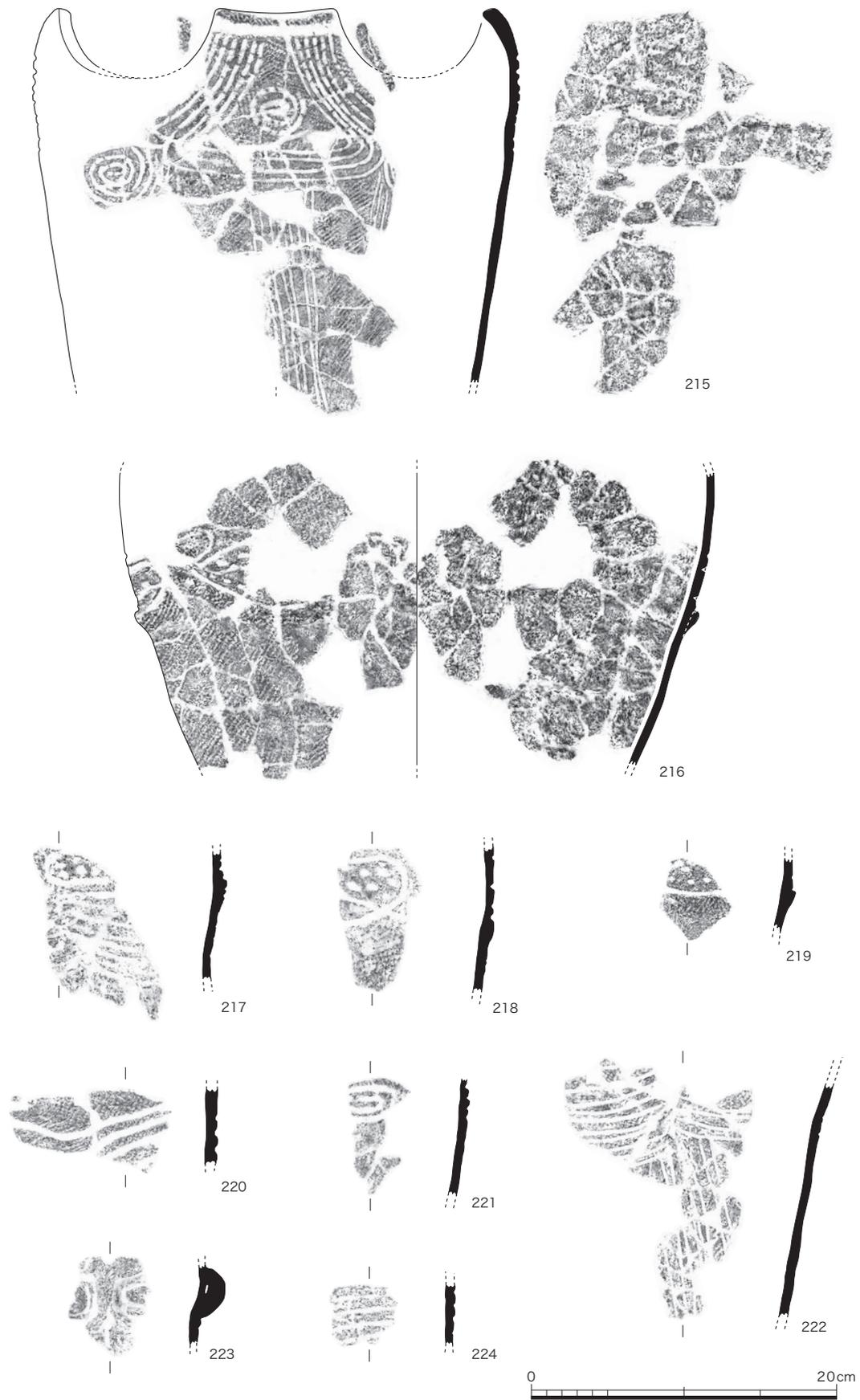
209・210・212 ~ 235 は土坑 SX01 でまとまって出土したもので、縄文時代中期末の北白川 C 式土器である。209 は波状口縁の深鉢で、口縁部と胴部は隆帯で分けられる。口縁部は端部ま



第 16 図 右京第 1078 次調査 出土遺物実測図 (1/4)



第17図 右京第1078次調査 出土遺物実測図2 (1/4)



第 18 図 右京第 1078 次調査 出土遺物実測図 3 (1/4)



第19図 右京第1078次調査 出土遺物実測図4 (1/4)

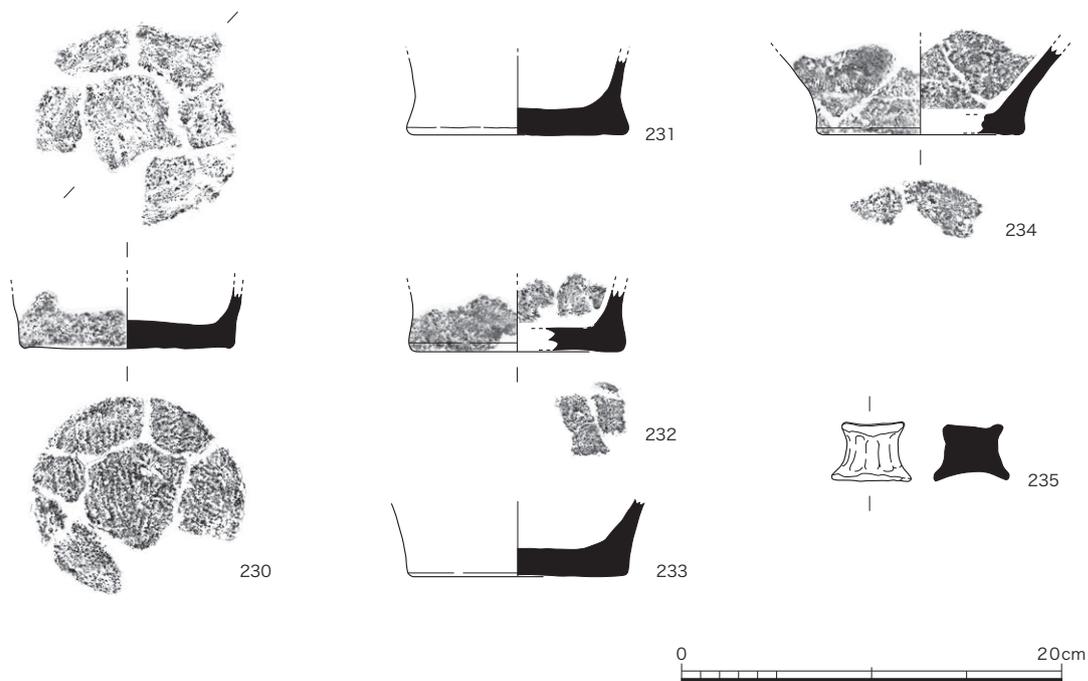
で縄文がおよび、横位に沈線文が施される。胴部は6～8条の沈線が垂下し、沈線間には波状の沈線も認められる。212は深鉢口縁部で、縄文が施された口縁部下に橋状把手と楕円形の区画文が認められる。橋状把手は上部に円形の刺突が認められ、把手以下は沈線が垂下する。楕円形の区画内には羽状沈線が施される。213は無文の口縁部下に刺突がめぐり、それ以下は縄文と縦位沈線が施される。214は無文の口縁部下に突帯が貼り付けられ、その上下に指頭圧痕が連続する。215は波状口縁の深鉢で、口縁部は内湾する。口縁端部、口縁から胴部にかけて縄文が施される。口縁部には押し引きによる三角形の区画が認められ、内部には渦巻文が配される。216～224は深鉢胴部片である。縄文のほか、内部に刺突が施される楕円形の区画文や曲線的な沈線文などが認められる。

211は北白川C式の深鉢、または浅鉢で、押し引きによる渦巻文が施される。出土位置や層位は不明である。

225～228は鉢、または浅鉢に分類されるものである。225・226は波状口縁で、波頂部下に1か所穿孔される。いずれもナデ調整である。226は口径21cm、器高12.5cm、底径8.7cmである。227は同一個体とみられる口縁部と底部片を図示した。口縁部は小片で、平口縁かどうかは明らかでない。228は口縁部付近に刻みが認められる。229は橋状の突起をもつ口縁部片で、左右に楕円形区画文が配される。浅鉢に含めたが、深鉢の可能性もあろう。

230～234は底部片である。230は底部外面に縄文が認められる。

235は土製の耳栓である。鼓形を呈し、長さ3.1cm、幅4.2cm、厚さ4.0cmを測る。上下端部の周縁は欠損・摩滅している。色調はにぶい黄橙色を呈する。



第20図 右京第1078次調査 出土遺物実測図5 (1/4)

第3章 まとめ

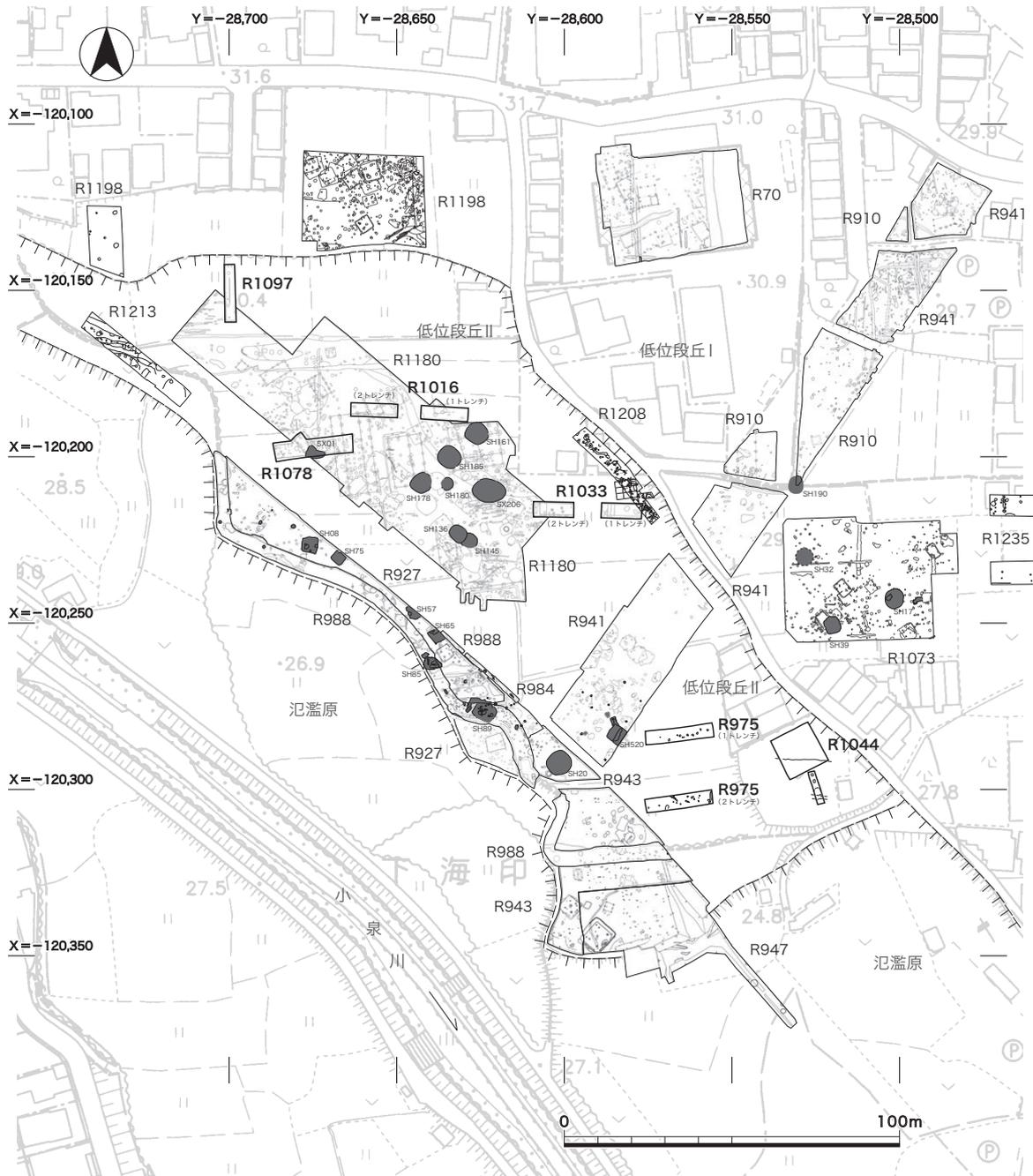
本調査では、主に縄文時代、飛鳥時代、奈良時代～長岡京期の遺構・遺物を確認することができた。以下では、平成21年度から平成26年度にかけて実施した各調査のうち主要な成果について、近年増加しつつある周辺での調査事例と合わせて簡単に述べ、まとめとしたい。

縄文時代については、中期と後期の遺構・遺物が確認されている。縄文時代中期では、右京第1078次調査で検出された土坑SX01から、中期末の北白川C式土器がまとまって出土した。これらの土器は北白川C式2～3期に位置付けられるものである。本遺構の検出によって、それまで確認されていた中期末の集落が北へ広がることが予想された。周辺では、右京第910次（増田2009）・927次（中川2010）・941次（増田ほか2010）・943次（岩松ほか2009）・988次（中川2012）・1073次（山本2015a）・1180次（岩崎2020）調査等で中期末の竪穴建物が18基検出されており、時期が明らかな土坑などを含めた主要な遺構は南北100m、東西200mの範囲に広がっている。同時に存在した建物はそのうちのいくつかになると考えられるが、当期の集落は近畿地方でも有数の規模といえる。竪穴建物の平面形には円形と隅円方形、方形のものが認められる。その多くが低位段丘Ⅱに立地するのに対し、右京第910次・1073次調査の竪穴建物には一段高い低位段丘Ⅰに立地するものがあり、他の建物群とはやや離れている。また、竪穴建物には石囲炉をもつものがあり、右京第1073次調査や右京第1180次調査などで少なくとも5基が確認されている。石囲炉は東日本で多くみられる遺構で、京都盆地では中期末に散見されるようになる。周辺では類例の少ない遺構であり、貴重な資料といえよう。

後期の遺構には、右京第975次・1078次調査の土坑や小穴などがある。右京第975次調査では、遺物の出土状況から確認された遺構の多くは後期後半に帰属する可能性が高い。注目される遺構には集石遺構SX14がある。浅い掘り込みに礫が集積するもので、底部で少量の骨片が確認されていることから、集石墓とみられる。右京第941次・943次調査区で確認された、土壙墓群の広がりを示すものであろう。土壙墓群には火葬された骨を埋納したものが2基含まれており、当時の葬制を知るうえで重要な資料である。周辺の調査では竪穴建物が12基程検出されており、後期後半のものが大半である。立地は低位段丘Ⅱに限られ、中期末の集落と重複している。右京第1213次調査（山本2022）では後期の土坑等が確認されていることから、集落が北西に広がる可能性がある。遺物は右京第975次調査で土器と共に、多量の石器・石製品が出土した。大多数はサヌカイト製の石器や剥片であるが、碧玉製の玉未成品やその素材とみられるもの、破片などが約80点出土している。破片には2mm程度の微細なものから、10mm前後のものがある。玉未成品は整形や研磨が粗く、穿孔部周辺での欠損が目立つことから、穿孔時に割れたものが廃棄されたのであろう。玉の未成品や緑色の石材は、右京第975次調査では2トレンチでのみ集中して出土しており、西に隣接する右京第943次調査の竪穴建物や土壙墓の埋土からも出土している。伊賀寺遺跡では広範囲にわたる調査が実施されているが、玉作に関する遺物は現段階で

は右京第 943 次・975 次調査など限られた範囲でのみ確認できる。サヌカイトの剥片など多くの調査区で普遍的に出土するのとは対照的であり、玉作は特定の区画でのみ行われた可能性が高い。縄文時代後期後半の伊賀寺遺跡は玉作を行っていた集落であることが明らかとなり、本調査によって貴重な資料を得ることができた。

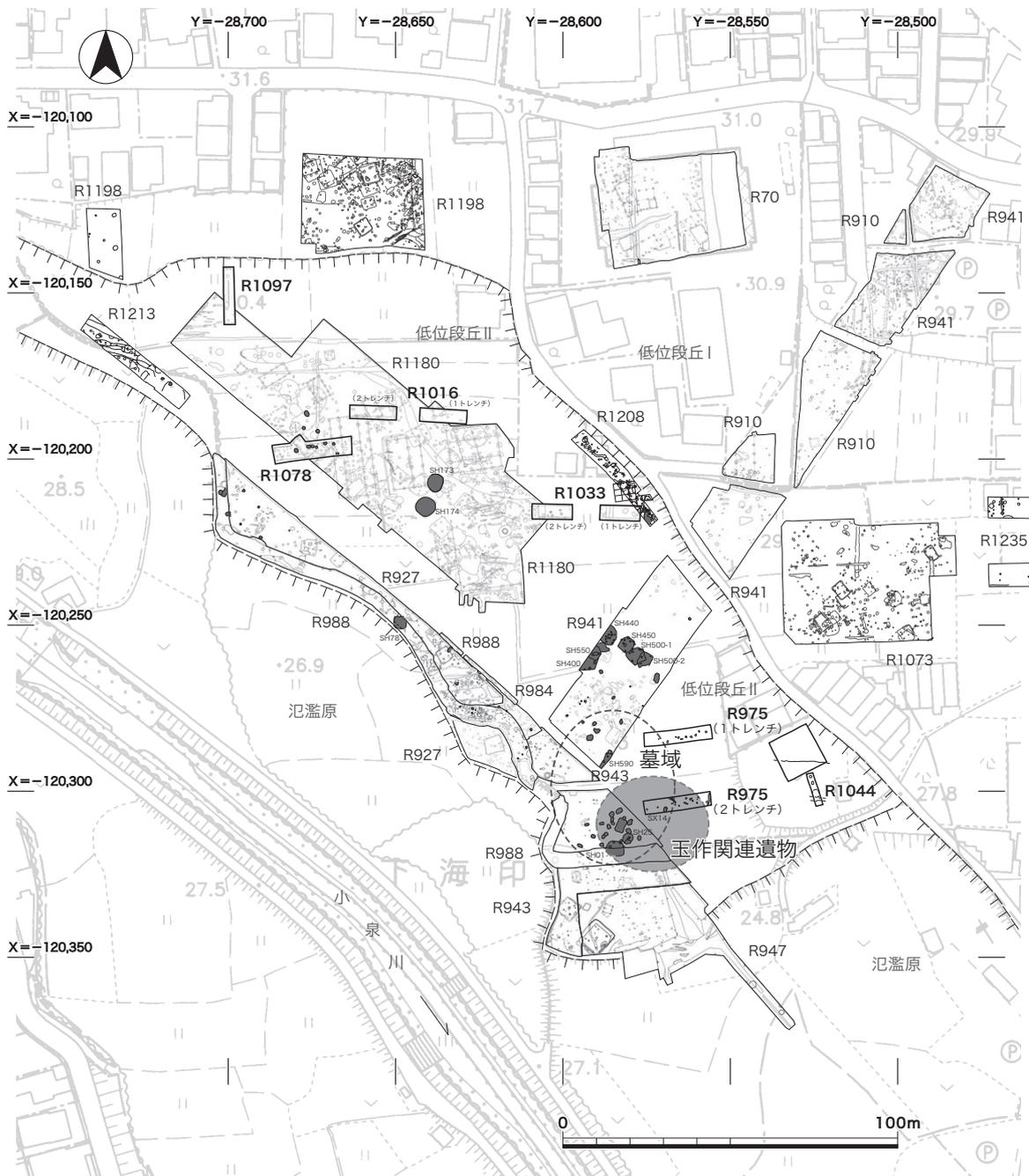
飛鳥時代では、右京第 1078 次調査で掘立柱建物が 2 棟検出された。右京第 1180 次調査ではこれらの建物を構成する柱穴が新たに確認されており、規模や形状が明らかとなった。同調査では、右京第 1016 次調査で検出された小穴が飛鳥時代の掘立柱建物を構成する柱穴であることも明らかになった。周辺の調査でも、古墳時代から飛鳥時代にかけての掘立柱建物や竪穴建物が多



第 21 図 縄文時代中期の主な遺構 (1/2000)

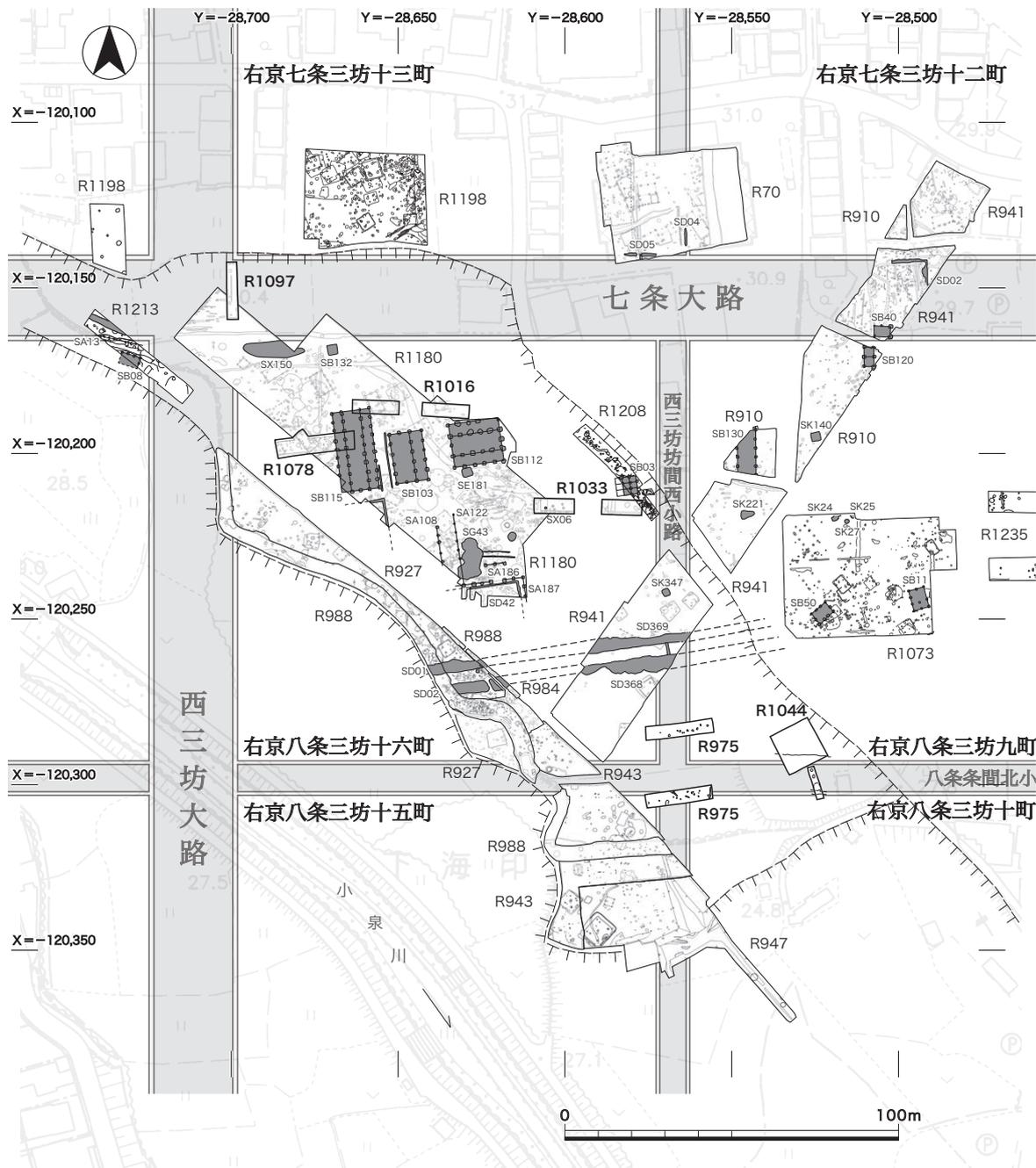
数確認されており、この段階でも大規模な集落であったことがうかがえる。右京第 1198 次調査（岩崎 2021）では、鉄滓やフィゴ、炉壁などが多く出土しており、鉄器の生産・加工がこうした大規模な集落を支える基盤のひとつであった可能性が指摘されている。本遺跡の南東には飛鳥時代の創建と考えられている鞍岡廃寺が隣接しており、その関連には注意しておきたい。

奈良時代から長岡京期にかけての遺構は、右京第 1016 次調査や右京第 1033 次調査で土坑や柱穴などが確認されている。狭小な調査区のため、調査時には掘立柱建物として認識できるものはなかったが、右京第 1180 次調査によって右京第 1016 次調査区の柱穴が梁行 2 間、桁行 9 間の長大な掘立柱建物を構成することが判明した。東西両面に庇をもち、身舎の柱間は 2.7m で



第 22 図 縄文時代後期の主な遺構 (1/2000)

ある。建物内部には甕据え付け穴とみられる円形の掘り込みが3列に並んでいた。なお、この建物は右京第1078次調査区内で新たに確認された柱穴も含んでいる。右京第1180次調査では、この建物と方位を揃えた大型の掘立柱建物が2棟検出されており、いずれも柱間は3mである。その他にも、同じ方位の柵や溝などが検出されている。これらの遺構群は、その配置から右京八条三坊十六町においてほぼ1町分を占地するものであり、建物の規模や構造などから、高位の人物の宅地であったと考えられている。しかし、これらの遺構群は長岡京期の通常の遺構とは異なって正方位を指向せず、軸方位は北から約8°西に傾いている。また、多くの出土土器は奈良時代にみられる特徴を有しているが、それらと共に長岡京期の瓦も出土している。こうした状況から、



第23図 奈良時代末～長岡京期の遺構 (1/2000)

右京第 1180 次調査の大型掘立柱建物群は長岡京遷都を前後する時期に位置づけられている。本調査で検出した奈良時代から長岡京期にかけての遺構や遺物の多くは、右京第 1180 次調査の遺構群に伴うものとする。右京第 1033 次調査で検出された、銭貨を納めた土師器の甕を埋納した SX06 は、右京第 1180 次調査の大規模な建物群に伴う地鎮などの可能性を指摘できよう。

前述のように、本調査は調査区が狭小なこともあり、縄文時代後期の玉作に関する貴重な資料は得られたものの、当初の目的である縄文時代の集落や長岡京造営の実態把握に関する情報としては断片的といわざるをえなかった。平成 30（2018）年度から開始された右京第 1180 次調査の調査区は、本調査の各調査区を包括するように設定され、膨大な数の遺構や遺物が検出された。右京第 1180 次調査の成果によって、本調査で確認された遺構の規模や性格が具体的に理解できるようになってきた。さらに、伊賀寺遺跡における縄文時代や古墳時代から飛鳥時代、奈良時代から長岡京期にかけての集落や条坊施工などの実態も明らかになりつつある。右京第 1180 次調査は、現段階では整理作業を実施している最中であるため、遺構や遺物についての詳細は今後報告されることになる。縄文時代の遺構群については、建物など重複、または近接するものが認められることから、土地利用の変遷は、今後の出土遺物の詳細な検討によってより鮮明になるものと考えられる。したがって、伊賀寺遺跡における各時代の集落や、長岡京の造営に関しては、その報告を待つて改めて検討することにしたい。

現在、長岡京市を含む乙訓地域は、JR 東海道線、阪急京都線などの鉄道、京都縦貫自動車道、名神高速道路など、京都・大阪の中心部や日本海側へのアクセスの良さで知られ、当地域の特性といえるだろう。古代には山陽道や山陰道などの官道が通過し、小泉川や小畑川など淀川水系の水上交通も物資の運搬などに欠かせないものであった。乙訓地域は、古墳時代には継体天皇による弟国宮遷都、平安時代には桓武天皇による長岡京遷都がなされており、その選地には陸上、内水面交通の利便性も考慮されたものと考えられる。縄文時代の伊賀寺遺跡で大規模な集落が営まれるのは、こうした交通の利便性と無関係ではないだろう。大阪府・奈良県の二上山や香川県の金山で産出されるサヌカイト、日本海沿岸地域との関係が推測される碧玉、和歌山県などからもたらされたとみられる結晶片岩など、遠隔地の石材が出土していることは、当時の活発な人や物の動きを示すものであろう。

伊賀寺遺跡は縄文時代中期末の拠点集落、後期後半の玉作を行った集落として、全国的に注目されている。本市の縄文時代を知るうえできわめて重要な遺跡であり、今後もその内容の把握、遺跡の保存と活用に努めることで、関係各氏・機関から賜ったご指導・ご協力と、多大な費用と労力をかけた発掘調査に報いたい。

引用・参考文献

- 泉 拓良ほか 1985 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲー北白川追分町縄文遺跡の調査ー』
京都大学埋蔵文化財研究センター
- 岩崎 誠 2014 「長岡京跡右京第 1078 次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第 66 冊 長岡京市教育委員会
- 岩崎 誠 2020 「右京第 1180 次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成 30 年度
(財) 長岡京市埋蔵文化財センター
- 岩崎 誠 2021 「長岡京跡右京第 1198 次調査概要」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』令和元年度
(財) 長岡京市埋蔵文化財センター
- 岩松 保 2005 「京都第二外環状道路関係遺跡平成 15 年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 113 冊
(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 岩松 保ほか 2006 「京都第二外環状道路関係遺跡平成 16 年度発掘調査概要 岸ノ下地区 [長岡京跡右京第 840 次・伊賀寺遺跡]」『京都府遺跡調査概報』第 118 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 岩松 保ほか 2009 「大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡発掘調査報告 伊賀寺地区の調査」
『京都府遺跡調査報告集』第 133 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 植村善博 1996 「第 1 章 自然環境 第一節 生活の基盤 一 地形」『長岡京市史』本文編一
- 岡崎研一 2010 「京都第二外環状道路関係遺跡平成 20 年度発掘調査報告 長岡京跡右京第 937 次調査・伊賀寺遺跡」
『京都府遺跡調査報告集』第 137 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 岡崎研一ほか 2010 「京都第二外環状道路関係遺跡平成 20 年度発掘調査報告 長岡京跡右京第 947 次調査・伊賀寺遺跡」
『京都府遺跡調査報告集』第 137 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 小田桐 淳 2010 「長岡京跡右京第 975 次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第 55 冊 長岡京市教育委員会
- 小田桐 淳 2011 「長岡京跡右京第 1016 次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第 59 冊 長岡京市教育委員会
- 小田桐 淳 2012 「長岡京跡右京第 1033 次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第 61 冊 長岡京市教育委員会
- 高橋美久二ほか 1982 「長岡京跡右京第 70 次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第 9 冊 長岡京市教育委員会
- 中川和哉 2008 「京都第二外環状道路関係遺跡平成 18 年度発掘調査報告 長岡京跡右京第 890 次・伊賀寺遺跡」
『京都府遺跡調査報告集』第 126 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中川和哉 2009 「京都第二外環状道路関係遺跡平成 19 年度発掘調査報告 長岡京跡右京第 901 次調査」
『京都府遺跡調査報告集』第 131 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中川和哉 2010 「京都第二外環状道路関係遺跡平成 19 年度調査報告 長岡京跡右京第 927 次・伊賀寺遺跡」
『京都府遺跡調査報告集』第 136 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中川和哉 2012 「京都第二外環状道路関係遺跡平成 21 年度発掘調査報告 長岡京跡右京第 984・988 次・伊賀寺遺跡」
『京都府遺跡調査報告集』第 148 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 原 秀樹 2013 「長岡京跡右京第 1044 次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第 64 冊 長岡京市教育委員会
- 原 秀樹 2014 「右京第 1050 次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成 24 年度
(公財) 長岡京市埋蔵文化財センター
- 増田孝彦 2009 「長岡京跡右京第 910 次・941 次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」
『京都府遺跡調査報告集』第 133 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 増田孝彦ほか 2010 「長岡京跡右京第 941 次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」
『京都府遺跡調査報告集』第 137 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 増田孝彦 2012 「京都第二外環状道路関係遺跡平成 21～23 年度発掘調査報告 長岡京跡第 1024 次・伊賀寺遺跡」
『京都府遺跡調査報告集』第 150 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 山下 研 2020 「伊賀寺遺跡の調査 遺構編」『長岡京市文化財調査報告書』第 75 冊 長岡京市教育委員会
- 山本輝雄 2015a 「右京第 1073 次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成 25 年度
(公財) 長岡京市埋蔵文化財センター
- 山本輝雄 2015b 「長岡京跡右京第 1097 次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第 68 冊 長岡京市教育委員会
- 山本輝雄 2020 「右京第 1213 次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』令和 2 年度
(公財) 長岡京市埋蔵文化財センター

付表-3 報告書抄録

| | |
|--------|-------------------------------|
| ふりがな | いがじいせき |
| 書名 | 伊賀寺遺跡 |
| 副書名 | |
| シリーズ名 | 長岡京市文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第79冊 |
| 編著者名 | 山下 研 |
| 編集機関 | 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|--------------------------------------|--|-------|------|-------------|--------------|----------|--------------------|------------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| ながおかきょうあと 長岡京跡 いがじいせき 伊賀寺遺跡 | ながおかきょうし 長岡京市 しもかいいんじしもうち 下海印寺下内 だ 田5-1、6-1 | 26209 | 107 | 34° 54' 43" | 135° 41' 25" | 20090610 | 160 m ² | 遺跡確認 調査 |
| | | | 96 | | | 20090818 | | |
| | ながおかきょうし 長岡京市 しもかいいんじしもうち 下海印寺下内 だ 田14-1番地 | | 107 | 34° 54' 47" | 135° 41' 22" | 20101213 | 112 m ² | 遺跡確認 調査 |
| | | | 96 | | | 20110125 | | |
| | ながおかきょうし 長岡京市 しもかいいんじしもうち 下海印寺下内 だ 田12-1 | | 107 | 34° 54' 46" | 135° 41' 24" | 20111017 | 120 m ² | 遺跡確認 調査 |
| | | | 96 | | | 20111109 | | |
| | ながおかきょうし 長岡京市 しもかいいんじしもうち 下海印寺下内 だ 田1-1 | | 107 | 34° 55' 43" | 135° 41' 26" | 20120702 | 187 m ² | 遺跡確認 調査 |
| | | | 96 | | | 20120829 | | |
| | ながおかきょうし 長岡京市 しもかいいんじしもうち 下海印寺下内 だ 田13-1 | | 107 | 34° 54' 46" | 139° 31' 20" | 20131209 | 98 m ² | 範囲確認 調査 |
| | | | 96 | | | 20140125 | | |
| | ながおかきょうし 長岡京市 しもかいいんじしもうち 下海印寺下内 だ 田23番地 | | 107 | 34° 54' 48" | 135° 41' 19" | 20141104 | 56 m ² | 範囲確認 調査 |
| | | | 96 | | | 20141126 | | |

※ 緯度、経度の測点は調査区の中心で、国土座標の旧座標系を使用している。

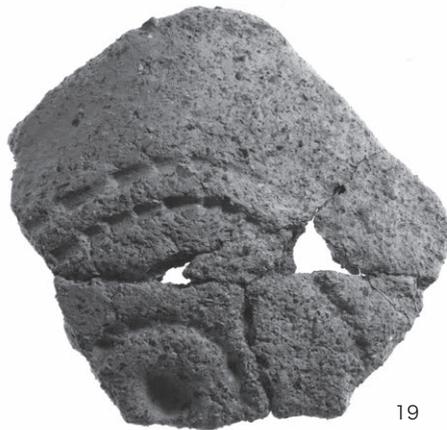
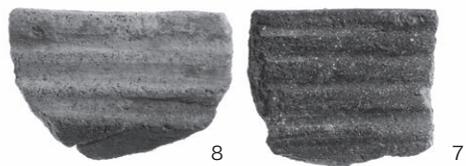
| 遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-------------------------------|----------|----------------------|---------------------------|---|--|
| 伊賀寺遺跡 長岡京跡 (右京第 975 次) | 集落 都城 | 縄文時代中・ 後期 平安時代 | 集石遺構、土坑 | 須恵器 平玉未成品、石鏃、石棒、 磨石、叩石、異形局部 磨製石器 | 縄文時代後期に平玉 を製作していた集落 を確認。 |
| 伊賀寺遺跡 長岡京跡 (右京第 1016 次) | 集落 都城 | 奈良時代 平安時代 | 柱穴、土坑 | 土錘、ファイゴ、炉壁、 縄文土器、サヌカイト | 奈良時代～長岡京期 の遺構群を確認。 |
| 伊賀寺遺跡 長岡京跡 (右京第 1033 次) | 集落 都城 | 奈良時代 平安時代 | 柱穴、土坑 | 土錘、ファイゴ、炉壁、 縄文土器、サヌカイト | 奈良時代～長岡京期 の遺構群を確認。 |
| 伊賀寺遺跡 長岡京跡 (右京第 1044 次) | 集落 都城 | 平安時代 | 旧流路跡 | 緑釉陶器 須恵器、土師器 | |
| 伊賀寺遺跡 長岡京跡 (右京第 1078 次) | 集落 都城 | 縄文時代 飛鳥時代 奈良時代 | 小穴状遺構、土坑、浅い 落ち込み、掘立柱建物 | 縄文土器、土師器 須恵器 | 北白川 C 式一括土器 が出土。縄文時代中 期～後期の集落のひ ろがりを確認。 |
| 伊賀寺遺跡 長岡京跡 (右京第 1097 次) | 集落 都城 | 飛鳥時代 奈良時代 | 小穴群、遺物包含層 | 縄文土器、土師器、須 恵器、製塩土器、緑釉 陶器、瓦器、石鏃 | |

图 版



長岡京跡右京第 975 次調査

図版
二



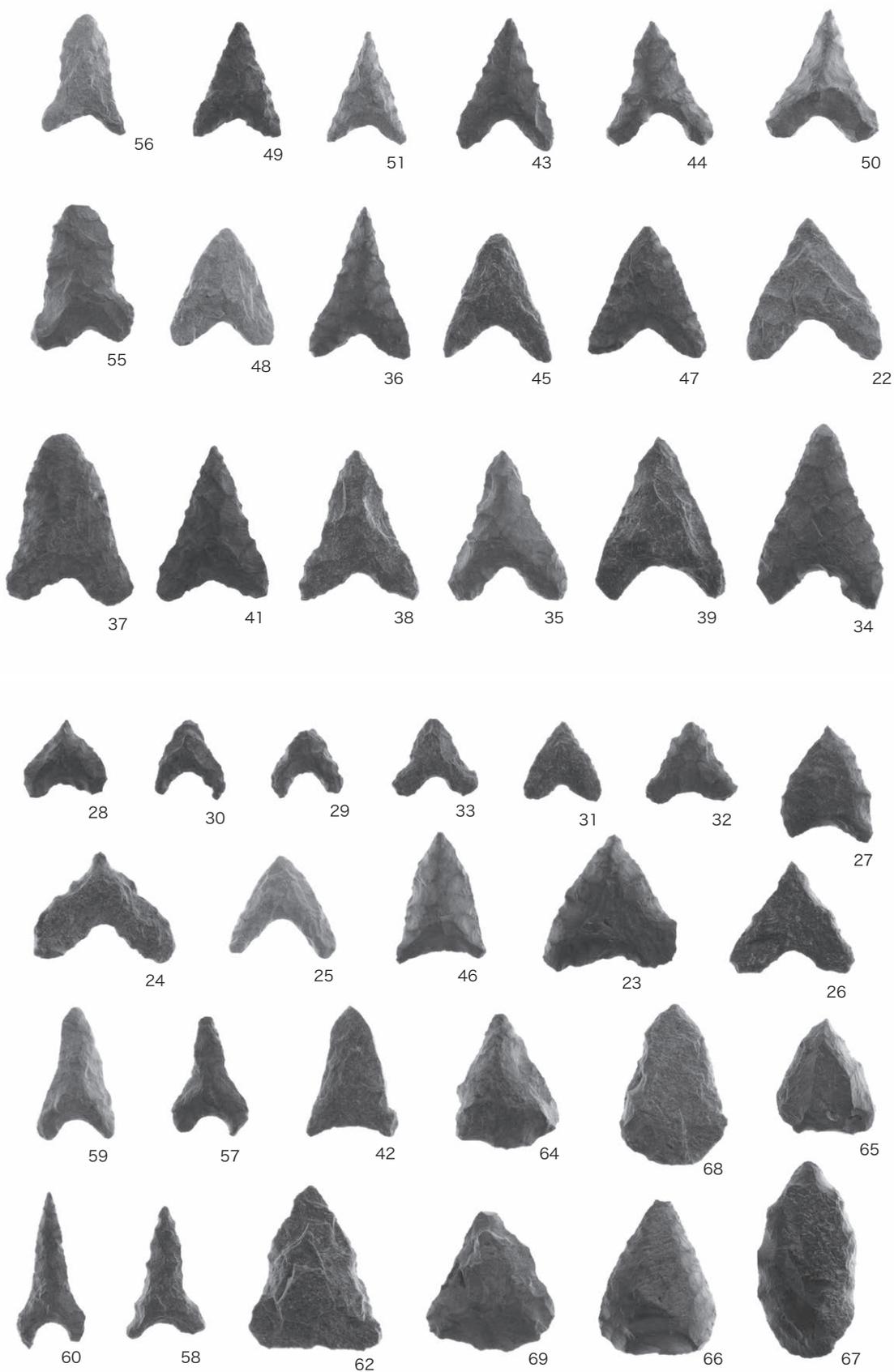
出土土器 2



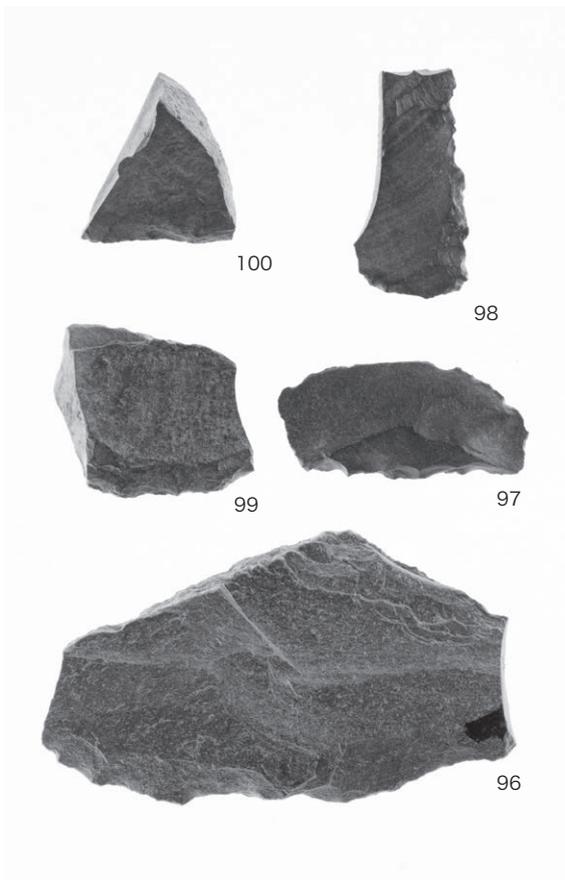
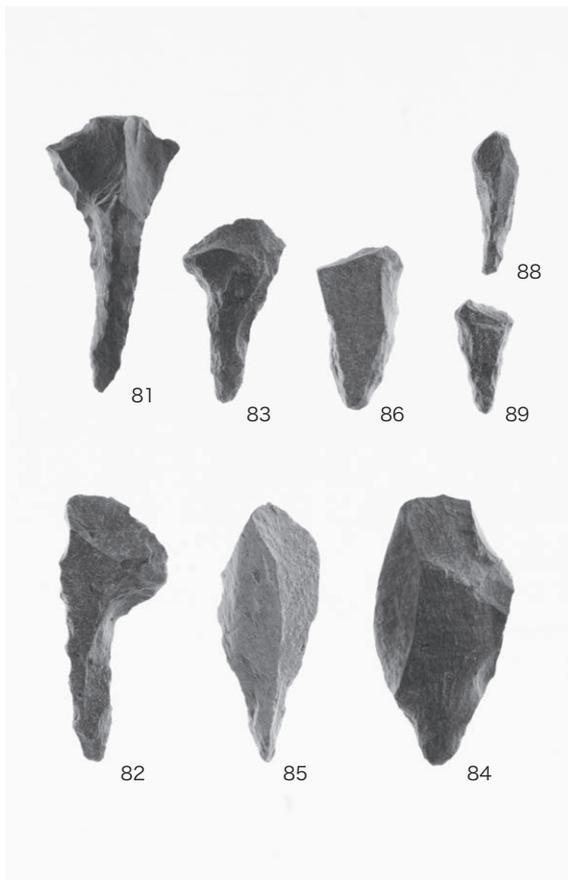
出土土器 3

長岡京跡右京第 975 次調査

図版四



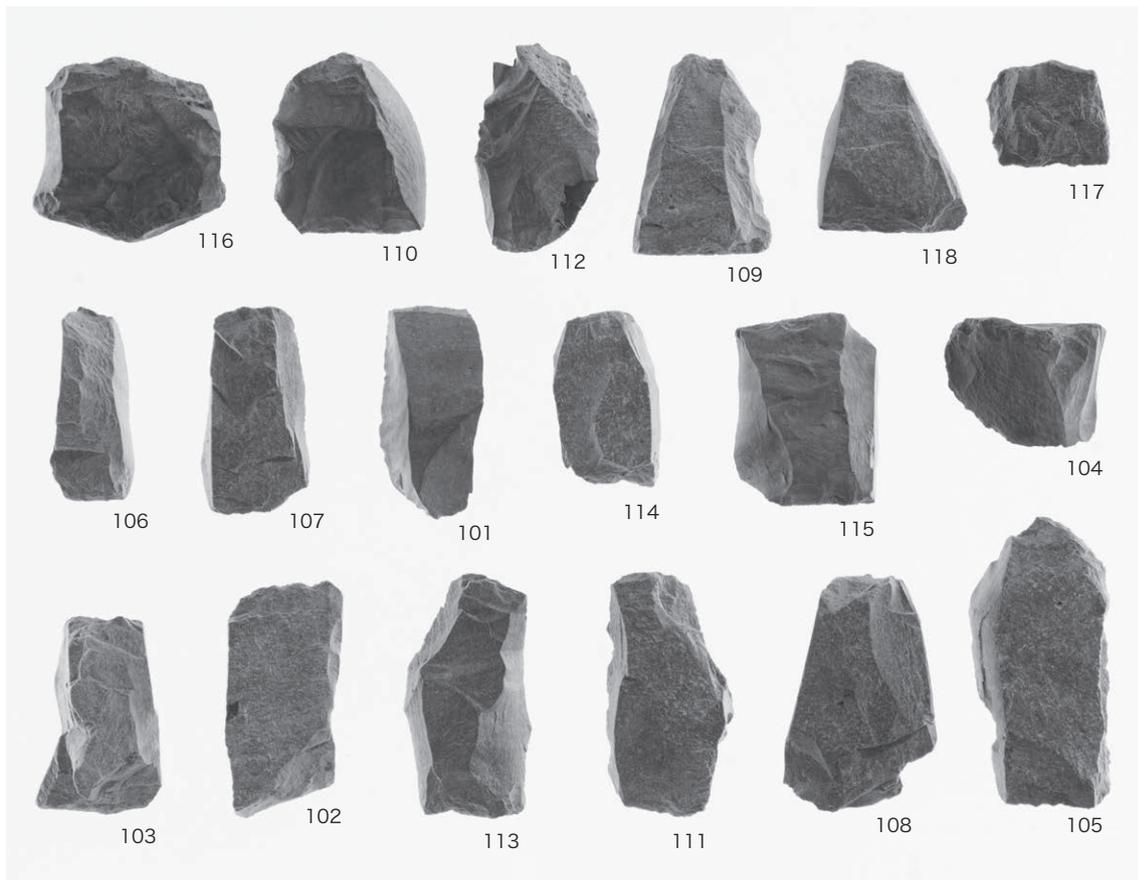
出土石器 1



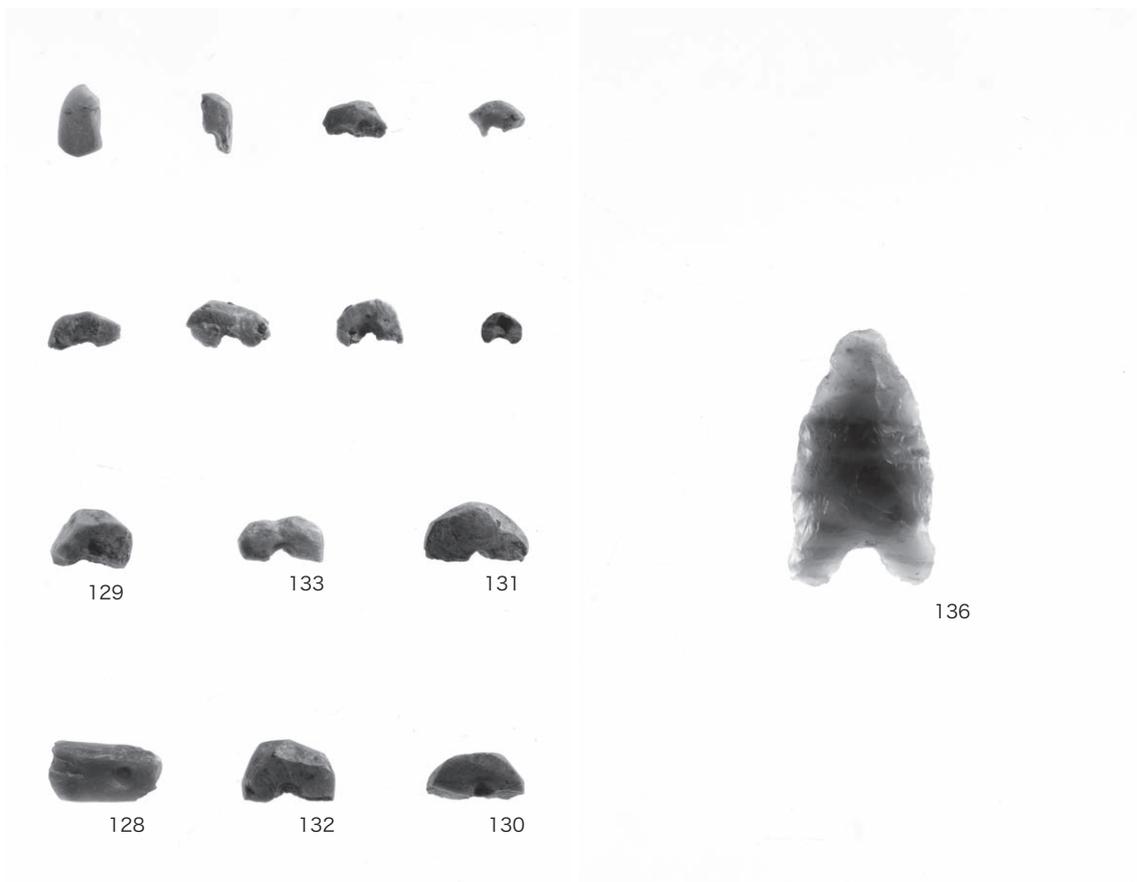
出土石器 2

長岡京跡右京第 975 次調査

図版六



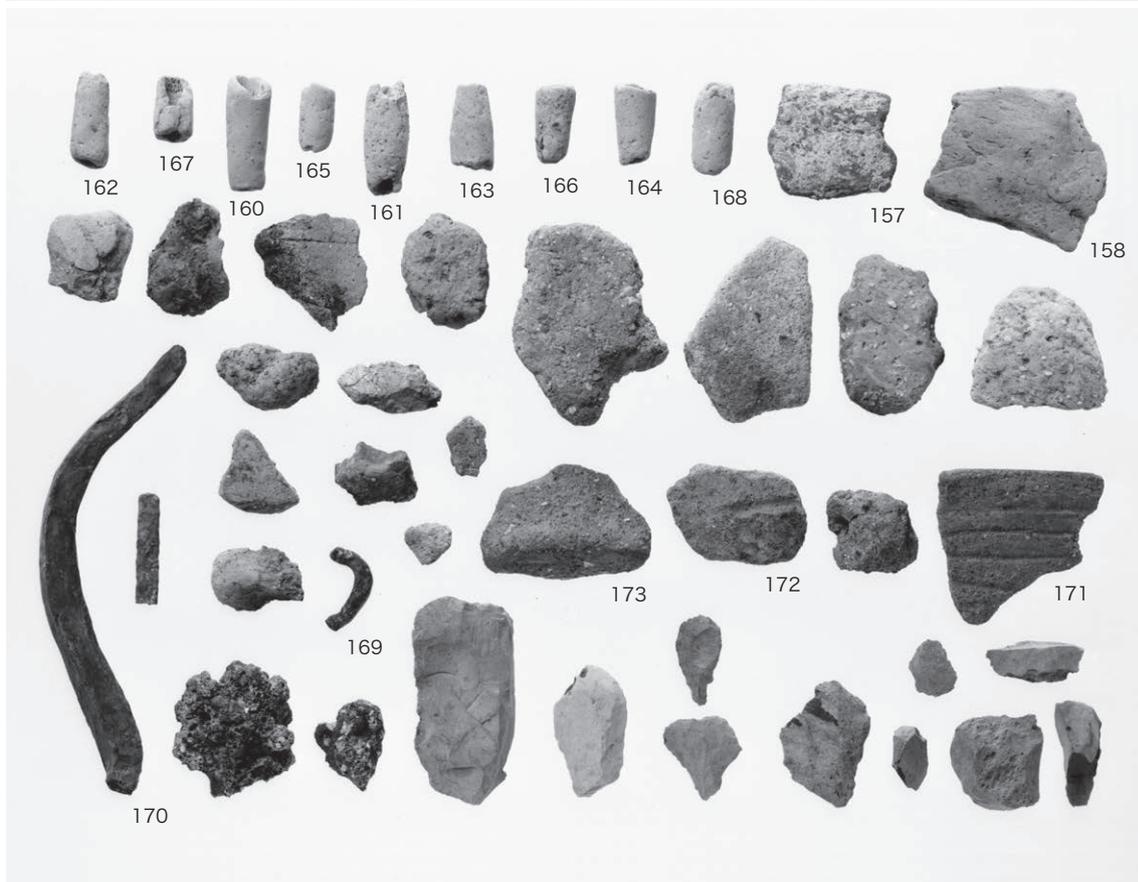
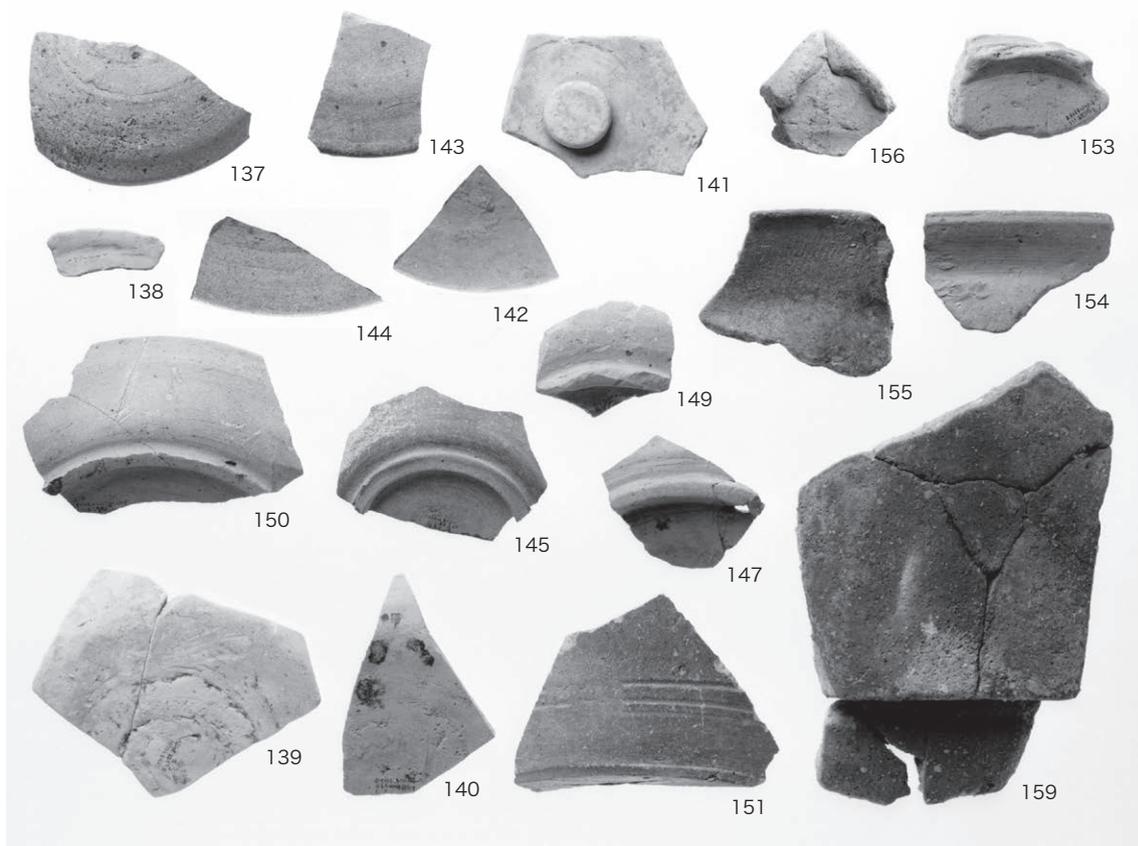
出土石器 3



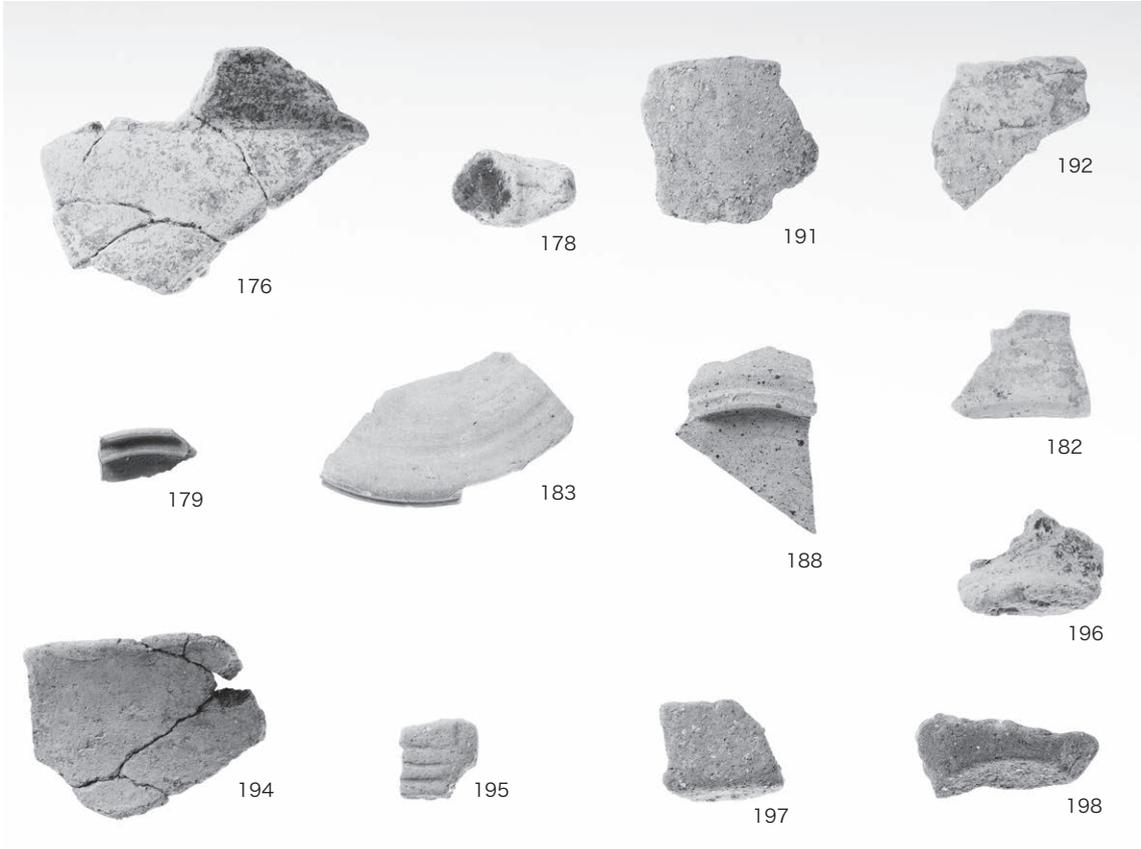
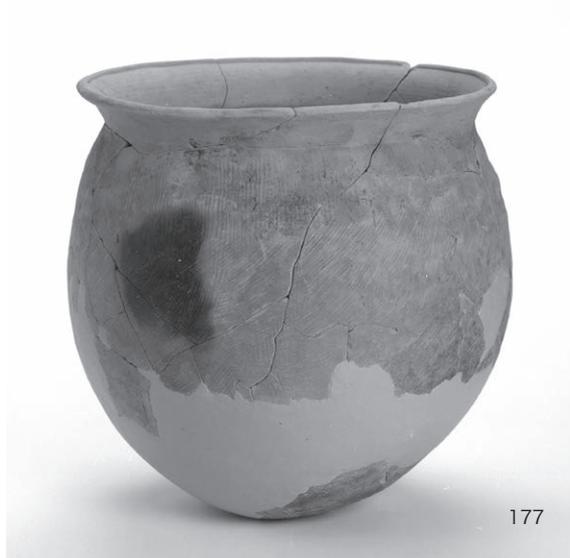
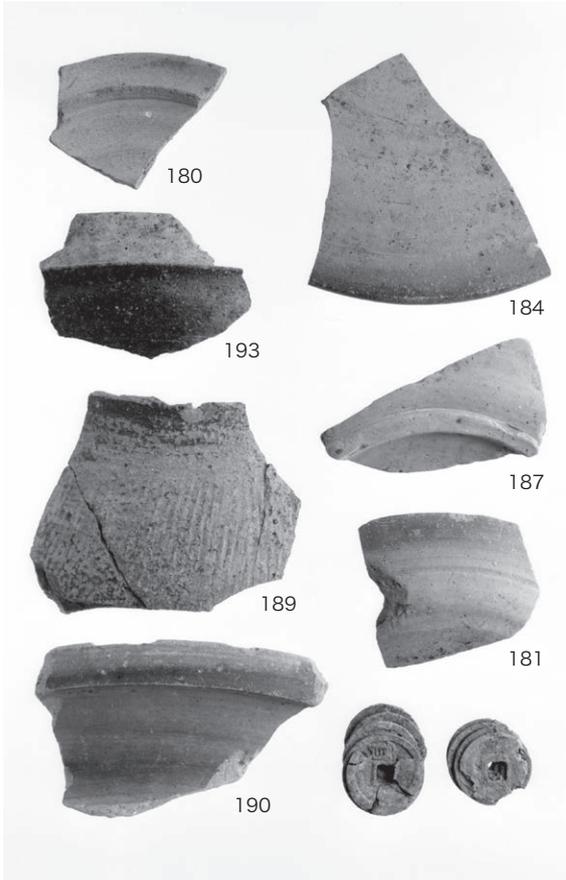
出土石器 4

長岡京跡右京第 1016 次調査

図版八



出土遺物

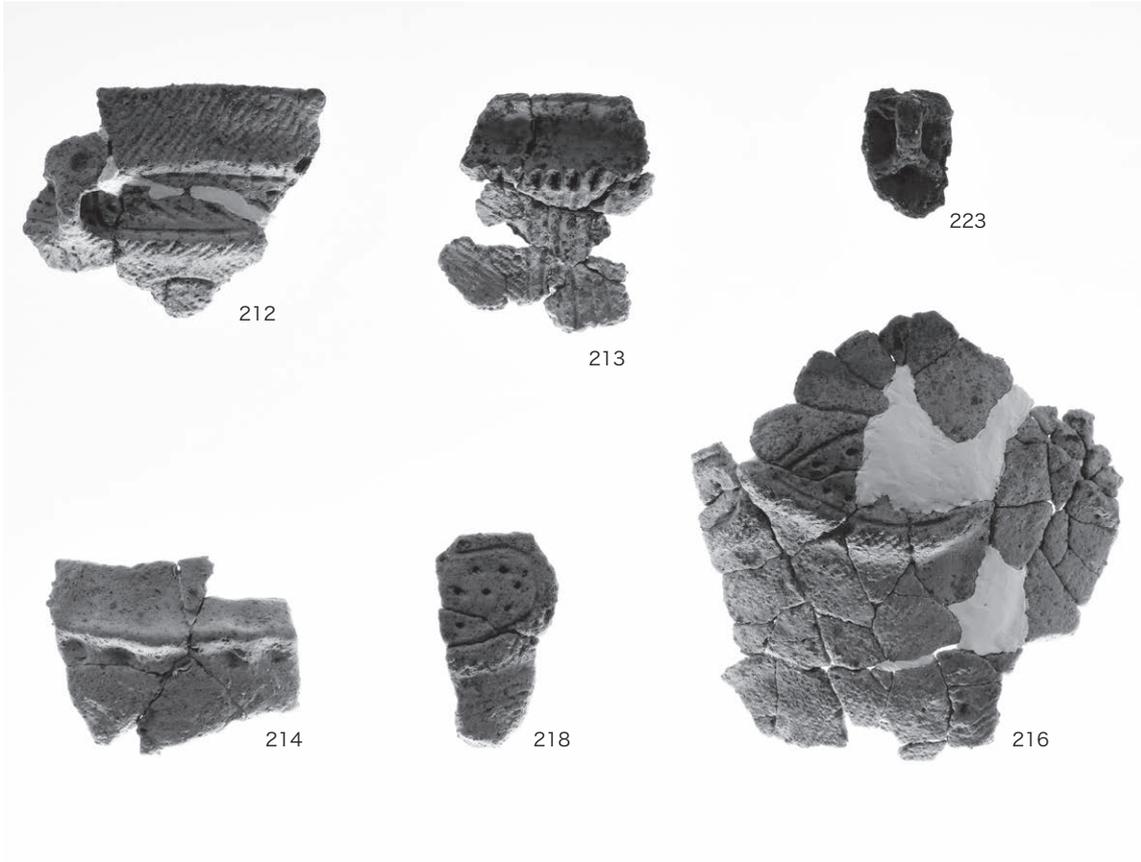


長岡京跡右京第 1078 次調査

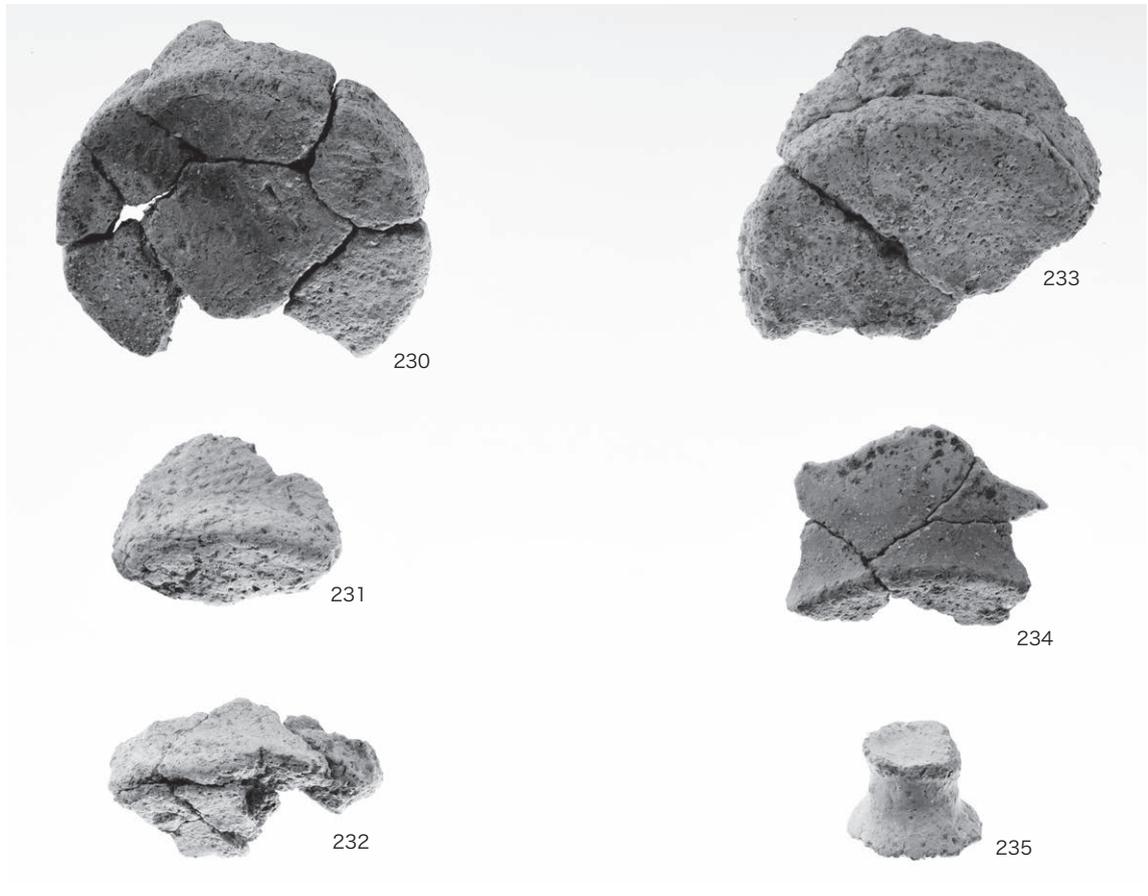
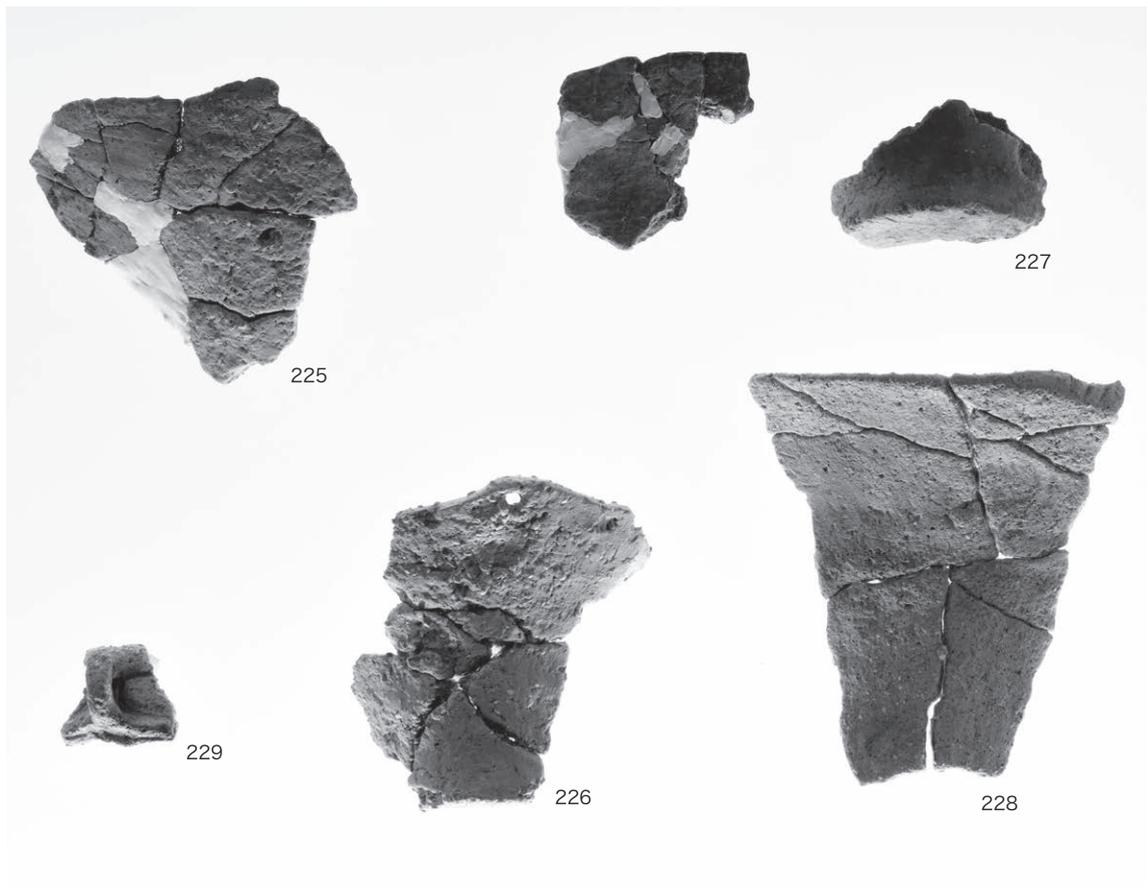
図版 | 〇



出土遺物 1



出土遺物 2



出土遺物 3

長岡京市文化財調査報告書 第 79 冊

令和 4 (2022) 年 3 月 30 日 発行

- 編 集 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒 617 - 0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1
電話 075 - 955 - 3622 FAX 075 - 951 - 0427
- 発 行 長岡京市教育委員会
〒 617 - 0851 京都府長岡京市開田一丁目 1 - 1
電話 075 - 951 - 2121 (代)
- 印 刷 山代印刷株式会社
〒 602 - 0062 京都府京都市上京区寺之内町通小川西入
宝鏡院東町 588 番地
電話 075 - 441 - 8177 FAX 075 - 441 - 8179

